
パラサイト・ブラッド 『聖者の行進』 <セインツ・マーチン>

薫紗桜妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パラサイト・ブラッド 『聖者の行進』 <セインツ・マーチン>

【Nコード】

N4430Q

【作者名】

薫紗桜妃

【あらすじ】

市販TRPG「パラサイト・ブラッド」を、人間市で活動するTRPGサークル<イマジン・モード>で実際にプレイされたシナリオをベースに、小説に書き起こしたものです。<悪魔憑き>と呼ばれる異形体を倒すため、人知れず戦うダークヒーローを描くアクションストーリーになります。自らも悪魔と契約した少年——羽柴らの活躍をお楽しみ下さい。

？

空港ターミナル。

日中は人でごった返すこのロビーも、深夜は靴音1つ無い静かな空間へと変わる。

ルーチンワークの警備がやってくることはあるが、なにこともなく通り過ぎる。

だがその足音が止まった。

ついと灯りをやる。

誰だと尋ねる声を吞む。

人じゃない。

背は低く、身体は体毛に覆われている。

四足…

——イヌだ。

銀色の長い毛足に透き通った碧い双眸、狼を想わせる引き締まった筋肉と体躯。

シベリアンハスキーと呼ばれるそれが暗闇から又々と浮かび上がった。

声にならない悲鳴が喉を鳴らして男はその場に硬直した。

つつ

ハスキーが右の前足を差し出す。
そのマが長く感じる。

上目遣いで男を見上げる。

イヌだからという安心感と、噛み付かれるかもしれない不安が同時に湧き上がる。

「だから先に行くなって云ったんですよ」
声がした。

イヌの小首が振り返る。

男が視線をそちらにやると、それはつま先から登場した。

子供： では無かったがまだ少年だ。

洒落た格好。

空港関係者には見えない。

見覚えがあるような、知り合いのような。

親しみある風貌からか。

いずれにしろかなり整った顔立ちだ。

「すいません、脅かしちゃった： なんですよね」

その軟らかな物言いを聞いて、怯えが収まる。

「キ、キミ、子供がこんなところで」

そう怒鳴ったつもりが声が震える。

「許可は頂いているんです」

言いながら首から提げた通行証を掲げる。

それだけで十分でしょとばかりに、ハスキーを追いやりながら少年が脇を抜ける。

「それはイヌを許可する代物じゃない」

肩を引きとめようと伸ばした手を、別の手が遮る。

「うるせえな、急いであるからこんな夜も夜更けに来てんだろが」
この声は左の耳に至近から叩き付けられたのだからたまったものではない。

音の塊が鼓膜をはたく。

意識が曖昧になりそうだ。

それを知ってかしらずか声の主は男の胸をドンと突いた。
警備の男がよろよろと倒れる。

その様子を右の肩越しに一瞥して、少し背を丸めて小走りにイヌと少年を追う。

彼もまた若かった。

だが先の少年とは違い、近寄りがたい空気を纏っている。
街中ですれ違うなら今ほど距離を近づけることは無意識でもないかもしれない。

それをどうこうしようとして立ち上がるだけの職業意識を持っているという自負はあったが、

このときはもうすでに闇に戻っていく彼らを見送るしかなかった。

「イヌは飛行機に乗れないのか」

だれかがそう尋ねた。

少し息を切らしながらほかのだれかが答える。

「乗るだけならいいんだけどね。美味しい食事も暖かい毛布もないのさ」

軽く首を振った。

「まさにお荷物つてやつだな」

別の声。ククつと片頬に笑みを浮かべて喜びを装う。

「羽柴さん、またケンカになりますよ」

平坦な口調で制す。

言い飽きたとも可能性が無いとも取れる。

どう取られようと気にした風は無い。

そういった別の意味で冷たい言い様だ。

このタイミングでゴミ箱が階段を転がった。

音を回しながら見事に少年の1人を巻き込んで踊り場までダンスをする。

免れた少年はため息をして額に手を当てた。

身動き1つしない少年を心配する声は上がらず、イヌの駆けるツメ音だけがこだました。

「てーな」

ポテチの袋を被ったまま少年がゆっくり上体を起こす。
顔はうつむいたままだ。

「ダメですよ、そういうの」

労わるとは取れず、説教ではなかったが、意志が含まれた物言いではあった。

それを聞いた風はなく、ゴミまみれの少年は衝動に身を任せた。

ヒュン

風の切れ裂く音が鳴った。

正面を直視した少年の頬を掠め、髪を千切り、階段を巻き上がる。
薄暗い階段に添うように、一瞬にして四足の足元を掬った。

キャウ、と鳴き声を噛み潰してイヌが身を翻す。

銀と白の細い光がはらりと散った。

軽く宙返りをして着地すると、少し滑り流れて踊り場を向いた。
のぞき降ろすに相対して場が膠着する。

二歩三步と少年の内の1人が階段を上がる。

それを眺めてイヌもゆっくりと向きを変えた。

取り残される形となったゴミまみれの少年も同じ調子で立ち上がる。
二人と一匹は再び足早に先を急いだ。

何事も無かったかのように。

それから数分が過ぎた。
ノイズ交じりの音声が飛び交う、そこは管制塔のコントロールルーム。

最小限の明かりの中に計器と睨み合う男女数人。それぞれが必死に何かと呼びかけていた。

各々の表情には徒労感が表れていた。

「応答は」

との問いに首を振る女性管制官。

もう何度振ったことだろうか。

それに対して指示するでもなく、室長はうつむいてじっと何かに耐えるかの如く押し黙ってしまった。

万策尽きた。

この一言に尽きる。

警視庁から送られた捜査官も手を拱しまねいていた。

アドバイスになるような話は聞けない。

聞いたところで決まりきった返答しか伺えないだろう。

ほかならない、このケースはあまりに例外過ぎるからだ。

一介の管制官には手に余るケースだった。

ボタン

騒がしくも重苦しいムードを打ち破るかのように、ドアが開く大きな音がした。

普段であれば無神経に開けたと怒鳴られようもしよう。

だが誰一人そう忠告しないのだから現場に居た者は誰しも、

例えそれが何であれ、この沈滞した局面を打開してくれると神にも
すぐる思いで聞いた。

その期待が裏切られることを恐れるかの如く、同時に全員が振り向

く。

それがイヌだとも知らず。

たしかに獣以外のナニモノでもない。

太くたくましい四肢。大きく鋭い牙。愛くるしい眼。

平時であれば人々を癒すであろうその姿も、今はただ頼りない下等な生物でしかない。

それがこの場にふさわしいかどうかという問いは念頭に無かった。

またその飼い主と思しき者にも同様に違和感があった。

この場にはふさわしくないあどけなさ。

まだ大人には届かない少年のにおいを残した彼らをちよつとしたざわめきが迎えた。

何から問うべきかと口を継いで出てこない。

大の大人が揃ってちよつとしたパニックだ。

「だれが連れて来たのかしら」

ようやくと管制官の女性が1人、それだけ言った。

それをキツカケに幾人かは職務に戻る。

よくはわからんと首を振り、室長がペットに子供を追い出そうと詰め寄る。

「なんだか知らんが出てつてくれ」

子供の入るところじゃないと通り一遍の言葉を並べる。

少年が許可証を差し挟んで留まろうとするもどこでも入れるわけじゃないと返される。

「でももう… 遅いですよ」

両肩を抑えたときに、たしかにその子はそう言った。

指先は管制室の中を指し示している。

なんのことかねとその方向に視線を送る。

室長がはつとする。

1人の少年がちよつと背を丸めて窓の外を眺めていた。次いで計器を見やり、かつてにレシーバーを手にして耳に当てた。子供が触るんじゃないと管制員の若い男性が取り返す。

そのやり取りはたしかに大人と子供のどこにでもある風景だった。しかし、ただ……あの少年がいったいいつどうやって管制室の中に入り込んだのか分らない。

たしかイヌと少年が1人。

そう最初にドアの方を向いたときにはそれしかいなかった。見落としなどしない。

いくら暗いからといってあの狭い通路幅に少年二人はいない。まして押し返そうという問答の中で、幅いっぱいの間からすり抜けるなんてことがあるうか。

それとも極度の緊張状態が続いた今、疲れから記憶が曖昧になったとでも言うのか。

管制官としてあるまじきことじゃないか。

「あのボクのこと知りません!？」

唐突に前に立っている子供がそう尋ねて来た。

自分に指を刺し、なかなかに憎めない笑顔を浮かべている。

そう言われたからなのか親しみある、よく見ればかなりの好青年だった。

てめーなんか知るかよ、と先に入った子供が罵る。

「残念ですねえ。もう3ヶ月になるし……話題性もあると思ったんですけど」

啞然とする男をグイと子供らしからぬ力で押しのけ、この場にそぐわぬ訪問者たちは

ついにコントロールルーム内に足を踏み入れた。

「もう少し頑張ります」

屈託の無い笑顔で振り向いて好青年はそう言った。

それにしても動揺の隠せない管制官たちが啞然とするのは仕方が無い。

だがなぜ、本庁から送り込まれた人らが関心すら向けないのか。むしろ黙認していると言っている。

まるで視線を合わせないようにしている。

「羽柴さんさあ、そろそろそのポテチの袋、捨てたらどうです？」
好青年が言った。

それに反応した少年が丸めた背を起こし頭の上に手を伸ばす。

がさり

アルミ製の袋が音を立てた。

一瞬場が静まり返る。

意にも介さずゴミ箱にこれを放る。

そつと、ふわりとそれは円筒の中心に吸い込まれた。

そしてククつと肩を揺らしてこう言った。

「ゴミかぶりの方がDUSTにお似合いだったかもな」

そしてもう一度肩を揺すった。

これには呆れ顔だったもう一人の少年も合わせるしかなかった。

その意味も分からず、動揺が続く室長の肩を叩く者があった。
いつのまにか傍に立っていた男が耳打ちする。

「アレは好きにさせてやってほしい。我々の与り知らぬ面々だ」
多くの事件に関わり、長年鍛え続けたこの屈強の男がそう言う。
それはかまいませんが、業務の邪魔になればと言った所で、
「それでは困る。貴方は機長に指示するのが仕事であって、
我々や彼らに指示するのが仕事ではない」
今度はその迫力の切っ先がこちらに向いたことを悟った。

「到着まで5分といったところかな」
航空レーダーの照り返しを下から浴びて、好青年が言った。
管制官の驚く様子をよそに、
「テレビであつたんですよ、同じもの。デキがいいですね」と笑顔
を見せる。

「たりめーだ、こつちがホンモンなの」
別の… 羽柴と呼ばれた少年はこれまたかつてにイスに座り、職員
のお菓子を断りも無く口に放り込む。まるで興味の無いといった態
度だ。

そんな相手に、もちろんプロップのほうですよと言い返すがなしの
つぶてだ。

羽柴さんには訊きませんと言って手近な大人を捉まえて話しかける
青年。

それを鼻で笑って、

「霧県、そいつらに訊いたって情報は出てこねえよ」
などと茶化す。最後のチョコプレッツを惜しげにしゃぶりながら。
「訊きもしないで、羽柴さんいつも…」

その言葉を遮り、

「おい、知ってたらコイツら。こんなに落ち着いてさ、
のどかに墜落ショーなんか見てるとでも思つか？」

墜落？ 縁起でもない。

たしかにこのフライトプランには無い、イレギュラーのスケジュー

ルではあつたが、
事故機ではない。

「このままでは誘導できるかどうか…」

さきほどの男に届く声で訊く。

「機長との連絡を続けて欲しい」

繰り返される同じ返答。

それができないからなのだが。

途方に暮れて窓越しに見渡す。

薄っすらと雪化粧に染まった滑走路には緊急車両が首を並べて待っていた。

主の帰宅を焦がれるイヌの如く。

あのハスキー犬も同じように窓の外を眺めていた。

心なしか緊張しているように見える。

それは動物の勘なのだろうか。

それとも思い過ごしだろうか。

メーデーから34分。

ついに機影が視界に入るのを各々が確認した。

室内に小さなどよめきが起こる。

「最初の連絡から此の方、けっきょく何の音沙汰も無く到着ですね」

室長が双眼鏡を手に言う。

「じゃあ機内の様子は…」

霧県と呼ばれた少年の問いに手のひらを振って答える。

「当機はハイジャックされた、緊急着陸を要請する… それだけです」

「ホントはどこに向かうはずだったんです？」

と、屈託無く室長の顔を覗き込む。

「あ、いやそれが… 目的地は変更ありません」

「大型機ですよ。これ見ると。突入は難しくないかな」

霧凧は羽柴をチラと見やる。

警察関係者には一瞥も無い。

「乗客が犠牲になるかもな」と羽柴。

「そんな無体な」

「エアフォース… エグゼクティブワン フォックス」

——え！？

霧凧と羽柴が同時に向き直る。

「それって、大統領のご家族が登場される専用機のコードですよ」

「よくご存知で」

「いえ、それがですね。ある特撮番組の、そう8話だったかな。たしかに出てましたよ」

と満足そうに話す霧凧。管制官には何のことか分からない。

「軍用機か」

やや間があって、

「それでDUSTなのか、そうかい」と。

羽柴の気分は高揚しているようだ。

「ならば機内にはSPもいる上に、乗客の数も知れるものよ」と、だれかが挟み込む。

「てかさ、そのメンツで乗っ取られるってなんだよ」

羽柴が呆れて笑う。

「それだけ危険な相手ってことですよ」

「まあオレが遣わされるくらいだからな」

少年たちのやり取りに管制官はもちろん、警察の人間もあっけに取られていた。

どう聞いたところで彼らは自分たちでこの事件を解決しようとしている。

しかも自信ありげに。

上からの指令とはいえ、にわかには信じられない話だ。
たまらず声をかける。

「警視庁のものだが、突入を始め現場の作戦はこちらで遂行する」
真剣な、重い面持ち。

少年二人はしばしあっけに取られた。

顔を見合わせて、言う。

「いやいや、どうぞどうぞ。好きにやってください」

「邪魔はしません、刑事さん」

そう言ってゲラゲラと下品に笑い出した。

その態度にムっとして、

「笑い事ではない！ 人命の掛った大事なことだ。

何をするつもりか知らんが子供に何ができる」

「いやージジイのマジ顔ウゼー、ゲロ出そう」

相手にもせず羽柴が笑った。

腹が痛えと言いながら床に設置された非常口に手を掛ける。

「おい、どこへ行く」

止めようとする刑事の前に影が割り込んだ。

低い唸り声。

イヌだ。

鋭い眼光で刑事を押し返す。

これには退くしかない。

「ゲンザブロウ、そのぐらいにしてやれよ」

ケケッと笑い、羽柴は素早く下穴に滑り込む。

その背をイヌのアタマが押し込んだ。

ワッ――

と小さな悲鳴が聞こえる。

クソイヌが！ と罵る声も上がってきた。

そのイヌの頭を撫でながら。

「ゲンザブロウ、やり過ぎだよ」

と言つて霧県が続いた。

外に出ると海沿い独特に荒れた空模様に、強い風が横薙ぎに襲ってきた。

雪が足元から渦を巻いて顔を削る。

小降りの雪ではあったが、視界を狭めるには十分であった。

「もう少し状況がわかった方が良くない？」

額に手をかざして霧県が訊いた。

「ばーっ！　そこまで来てんだろーに」

そう言つて羽柴が指差した先に赤と青の翼端灯が点滅した。

霧県が顔を強張らせる。

「秀長の言つとおりだ、霧県。あの者共に事態が掴めているとは思えぬ」

だれかが言つた。

それを聞いて霧県はコクコクと首を縦に振る。

「いいよゲンザブロウ。いつでも話は聞けるさ」

そう言つてにつこりと笑う。

数歩先を歩いていたイヌがこちらを向いた。

「さすがだな、ウオーコイト」

「まあ、…あ、早速…」

言いかけて霧県が携帯を手にした。

「通信記録をさらつてるんだけど、おかしいよ」

「何だ」

「機長は何事もないと言つてる、繰り返しね」

イヌが立ち止まった。

「分からぬな」

「ボクだつてそうさ」

ともう一度耳を澄ます。

「最初の通信ではコックピットでなにか…　副操縦士が怒鳴ってる

声や…

そう、モノがぶつかるような音もあったようだけど」

「そうか」

「——そうか、って。それだけ？」

霧凧がきよとした表情を見ると、きびすを返して、

「分からねえか」

「脅されてるってコト？」

「かもしれないが、我らからすればもう1つの可能性も垣間見える」

ややあつて、

「そうか、そうだね。勘違いしていたよ。ボクは今日、力仕事なのかなって思ってたから」

「それにこしたことはないがな」

その返答はずっと先の闇に消え入る。

イヌが跳躍し、数メートルも高く飛び上がったかと思うとすぐに視界から消えた。

「待ってよ、機内のようにすも調べたいんだ」

霧凧は携帯を操作しながら歩き出した。

海上の誘導灯上空に、連邦が保有する軍用旅客機VC-25が差し掛かった。

音と衝撃が波に打ち付ける。

その鼻先数百メートル、真正面に羽柴秀長が立つ。

左手をポケットに手を入れ、いつものように少し背を丸めていた。

右手にはポータブルのゲーム機を手にして。

当然視線は画面に釘付けた。

その後ろ十メートルのところにイヌと霧凧がいる。

まずイヌが、続いて霧凧が近寄った。

「ここって危ないですよね」

「遅せえぞ、クソガキにクソイヌ」

目もくれずに云った。

「羽柴さんが早すぎなんです。尋常じゃなくね」

「ああ、ミスった！」

ポーダブルが雪にめりこむ。

グイと詰め寄り、

「霧県でめえ。くだらねえこと云うからよ」

「こんなときにゲームですか」

と云われて、秀長の目がクワつと見開かれた。

霧県の肩がビクつとする。

「リアルタイムでやんねえとならねえイベントなんだよ」

霧県は言葉も返さず下手くそな苦笑いで濁した。

「ゲームをなあ、マジでやったこともねえくせに生意気なんだよ霧県」

「やってますよ」

「だらつ！ ろくに勝てねえのによく言う」

「この前勝ちましたよ。カード無双で」

「クソが、資産ゲーじゃねえか」

「ボクはDUSTの給料をカードに次ぎ込んでるんです。羽柴さんしないじゃないっすかあ」

「お、オレは仕事がらみに金がかんだよ」

「支給に泣きついたって云ってましたよ、看縞さんが」

「！っ あのクソアマ」

ズイ、と塊が二人の足元を縫い歩く。

「見る」

声が下から上がる。

イヌのアゴが上を向いた。

その先に青白い閃光が瞬いた。
幾条とも。

それはほんの短い間に、左から右へ。
数十メートルの広い間隔で流れた。

同時に炎が上がる。

爆発が1つ2つと起こり、煙が球状に膨れ上がった。

その瞬間機体から両翼が離れ、水平に飛んだ。

「変身っ！」

掛け声が3つ、機体の激突音に掻き消される。

旅客機の胴体は雪に頭から突っ込み、中央から折れた。

そのまま上空に舞い上がり、縦に一回転して再び地面を殴打する。

雪のベールが数百メートルの範囲に広がり、滑走路を覆い隠すように包み込む。

その中に少年たちは巻き込まれた。

助かるうはずも無い。

両翼は水平に回転を始め、破片を薙ぎ払いながら飛んだ。

その上面に雷鳴が轟き、影が舞った。

それは人影のダンス。

1つ、2つ…

5、6はあろうか。

右翼に飛び移りながら、入り交じり踊る。

その内の1つが、別の1つと衝突して翼から堕ちた。

次に回転する力に飛ばされて1つが雪の霞に消えた。

そこで影がピタリと停まる。

この間わずかに数秒。

そして跳躍。

出遅れた影を巨大な物体が襲う。

もう1つの翼。

左翼が猛スピードで回転し、右翼上の影を巻き払った。

その様子を最後まで見せず、全てを1つに丸めるように爆炎が呑み込んだ。

管制官と警察、レスキューが見守る中、VC-25は壮絶な最後を遂げ、雪闇に沈んだ。

観客が呆気にとられる中、時間だけが無情に過ぎて行く。

いち早くレスキュー車両が動き出すが、業火がこれを阻む。

人間の介入を許さぬ悪魔の炎。

その中に、外からは見えない地獄絵図に立ち上がるものがあつた。

それはあまりにふさわしい、異形の姿。

人の姿を模してはいるが、ほかならぬもの、悪魔。

だれもがそう呟くに違いない。

関節が動くたびに、キチキチと金属とも生物とも判別できない奇怪な音が鳴る。

複眼の巨大な眼は炎の照り返しに不気味な乱反射を見せ、周囲を睨み潰す。

甲虫のような四肢を伸ばし、金属の瓦礫を軽々と押しのけ仁王立ちする。

金切り声のような恐ろしい音波を発すると、次にゆっくり首を後ろに向けた。

その視線の先に、これまたこの世のものとは思えない化物の姿があった。

全身に小さな棘を生やし、滑らかな光沢を持つ体皮に炎の真紅をギラギラと纏い、

威圧する。

これがもう一体の異形を焚きつけた。

キチキチと鳴らしながら身体の向きを入れ替える。

2体は対峙した。

距離十メートル。

棘付きは微動だにしない。

それを怯えと捉えたか、先に甲虫魔人が動いた。

人の動きを遥かに凌駕する、高速の切り裂き。

風よりも早い切っ先がもう1体を襲う。

ギイヤン

金属がぶつかり合う不快音が空気を裂いた。

赤い異形が倒れる。

甲虫がキチキチとまるで高笑いのような音波を鳴らした。

グヒュン

粘りのある、肉の千切れる音が続いた。

真紅の悪魔は上体を反らし、一回転しながら両腕を交差させる。

甲虫の一閃を紙一重で交わし、その下を掻い潜るように刃を振りぬく。

足が大地に触れ、徐々にスピードを落としながらまた元の立ち姿に戻る。

その完成を見届けて、甲虫魔人がくず折れる。

下半身が瞬時に十数メートルの彼方に飛び、上半身だけが瓦礫に落ち、そして事切れた。

グズグズと溶解し、次に縮み、肌色の肉体に変貌する。

黒い衣服片が肩口に残る以外は全裸の男。

その上半身だけがそこにあった。

やがてじわじわと血が広がり、炎に焼けて悪臭を漂わせる。

その間もずっと、その様子を赤い悪魔は凝視し続けていた。

やおら左手首を捻る。

腕の装甲が展開し、小型の銃器を模した器官が飛び出す。

その銃口を倒れている男の首元に添える。

カチッ

と、小さな音がして銃器から放射状に青白い光が出る。

光が照射された部分にサークル状の痕ができたかと思うと、中心からなにか結晶状の物体が現れた。プリズム効果によりキラキラと七

色を反射し、ゆっくりと体内から出てくると、そのまま銃口の中に吸い込まれていった。

「これであなただも人としての死を迎えられる・・・」

「おい」

機体中央の壁が崩れて、人間の声がした。

この禍々しき者からわずかな位置。

だがしかし臆する様子は無い。

勇気ある者が、恐れ知らずの愚か者が。

異形が動かぬことをいいことに、声の主はズイと距離を詰める。

「聞いてんのかこのクソガキ！」

そう怒鳴ると、

「あ、羽柴さん」

と、悪魔が返した。

「羽柴さん、じゃねえよその気味悪いカツコだよ」

さきほど怪物を真つ二つにした化物の胸をドンと突付く。

「そうかな。ボクの番組ほどじゃないけどカツコイイと思う」

「だらつ！ぬけたこと云ってんじゃねえ」

羽柴がぺつとツバを吐く。

「それで、生存者はいませんでしたか」

悪魔が尋ねると、羽柴がアゴでその背中の方を示した。

振り向いて確かめるもあるのは瓦礫の山と炎、そして煙。

「すいません、ボクにはちょっと見えないんですけど」

「ほら、あれ。お前がその生存者とやらを殺っちまったんだろっが」

あつ――

と、気づいて悪魔が狼狽した。

「で、ですけどいきなり襲い掛かって来たんですよ」

「それをどうにかすんのがDUSTじゃねえの？」

返す言葉も無く、世にも恐ろしいこの悪魔が立ちすくんだ。
「どれ！」

グイと悪魔を押しつけて羽柴が男の死体に近づく。
股を開いてしゃがみ、ツバ吐きかける。

羽柴のゆるい表情が変わる。

「霧島よお」

背中越しに名前を呼んだ。

「なんです」

「……いやなんでもねえ」

羽柴には分かった。

コイツはカンタンじゃねえと。

「やられたか」

「は？」

「眠い返事してんじゃねえ！」

「え、いえ斬られましたけど……」

そう云って攻撃が命中した胸をさする。

羽柴がそこに目をやると、悪魔の胸板はキラリと黒光りしそれが眩しいと思わず目を細めた。

ふうと一息吐いてうつむくと、トンとその胸をゴブシで突付く。

「だらが。何ともねえじゃねえか」

「ええっ！ ホントに斬られたんですってば」

羽柴はそれは聴かずにまた背をちよつと丸めると歩き出した。

2、3瓦礫の小山を越えたところで、

「イヌ畜生は何してる。遊んでやがんのか」と訊く。

「さあわかりません」

「おっちんでりやいいんだがな」

「羽柴さんっ！！」

霧島からはククつと背中が揺れるのが見えた。

「期待に沿えず痛みいるな」

不意に聞こえた声の方を仰ぎ見る。

少し離れた胴体、天井の上にイヌが構えていた。

チッと舌打ちで羽柴がコレを迎える。

「女が1人、存命だ」

それだけ言い残すと翻って墜落機の向こう側に降りた。

ヒュウと口笛を吹くと羽柴が足取りを軽くしてこれを追いかけていった。

消化が始まった。

レスキュー車両が炎の弱まった場所から集中的に消火剤と放水をし、鎮火を急ぐ。

救助の先発隊が決死の突入部隊を編成し、1人、また1人と炎の中に身を投げ入れていく。

現場の状況を見るに絶望的なことは明らかだったが、望みを捨てるわけにはいかないとばかりに手を緩めることなく救助作業を進める。

その様子を誰しもが望むはずであるが、歓迎しない者達もあった。

「早くしないとみんな来ちゃいますよ」

霧県がそわそわしながらなんとなくその方向を見やる。

瓦礫と熱が辺りを囲い、実際の向きなど分かるうもないが。

「深憂なれば変身を解くがいい」

「そうはいかないよ。こんな状況じゃ」

霧県が異を唱える。

「まだ悪魔憑きがいるかもしれないし――」

これには羽柴も頷いた。

「だとしたらどうする」

「女は人間に渡せばよい」

「こんなカワイイ娘をかあ!？」

今度は羽柴が異を唱えた。

たしかに目の前で倒れている少女は端正な顔立ちをしていた。

煤にまみれてはいるが、ピュアゴールドの髪に透き通るような白い肌。

やや幼い感じも残るが、年のころは二十歳前だろうか、かわいい。日本人よりも大人びて見える。

「とにかく――」

羽柴が少女に自分の上着を着せた。

墜落の炎で焼かれてしまったか、彼女はほとんど全裸の状態で横たわっていた。

両の腕に抱え挙げるとすくりと立ち上がった。

「オレたちじゃ治療は難しい、早く渡しちまおうぜ」

「届け物はこちらでお預かりしよう」

なに、と振り返った羽柴の肩口が10度の角度に切り裂かれた。

ばつくりと避けた傷口から血飛沫が身体を染め上げる。

だがしかし、秀長は顔色1つ変えない。

それどころかニヤリと頬の血を舐め上げて、不適な笑いを浮かべる。

「これだからよその国の挨拶はなあってねえ」

ずずいと歩を進める羽柴の足元に四足が割って入った。

「身どもに任せ」

「ゲンザブロウ――」

「ぼくが道を開けます」

言うが早いか赤い悪魔が立ち塞がる外壁を空高く放り投げた。

「創が深いようだか」

「心配すんなっ」

と羽柴がぷうと力む。頬にぽつと血の気が上がると傷口が見る見ると塞がっていった。

「さあ急いで」

「るせえやクソガキ。こっちは今生身なんだぞ」

走り出す羽柴めがけて、新たに現れた異形が飛び掛った。

「ヘンシン」

1つの掛け声とともに四足の影が宙を舞う。

それが交差して鈍い音を響かせると両者は背中同士を向けて離れて着地した。

小片が散って、これが大地に堕ちるまでもう一撃。

両者の刃が交差し、激しい鏝迫り合いの音を鳴らす。

切り結びのエネルギーが双方を弾き飛ばし、足場の悪さも加わって体軀を滑り流す。

僅かにイヌが速く姿勢を切り返した。

その間も変身が続き、ただでさえ大きな身体がさらに2回り、3回りも膨らんだ。

体毛は鋭い金属の如き重なりと化し、そのしなりで鎧の形を形成する。

額から現れた第3の瞳が敵を眼光で押し潰そうとする。

そこから放射された力が全身を覆うように光のベールとなり、特異な姿を強調した。

極太の脚で瓦礫を払い飛ばし、時間をも凌駕しかねぬスピードで跳躍する。

口から突き出た銀色の牙が空間ごと敵を切り裂いた。

返り討ちと放たれた雷光は主を失いチリチリと瓦礫の山を焼くに終わる。

四足は引き千切って啜えた首級をグンと振り、瓦礫の中に放り捨てた。

「奴隷の分際で刃向かう愚考を知れ」

ゲンザブロウと呼ばれたイヌがそう、静かにつぶやいた。

他方、それよりわずかに数分が過ぎた。

惨状が行く手を遮り、少女の命は風前の灯火だった。

羽柴が齒軋りする音が聞こえる。

「これだからウォーコイトは頼りねえってんだよ」

「そんなこと云われても、せいじっぱいです」

「オレがやったほうがマシだわ」

「羽柴さんだってそんなでもないですよ」

なにい、と向きになったところで二人に大量の水が掛けられた。

それは消防隊の位置が、災害からの脱出を約束する合図でもあった。

「だれかいるのか」

そこに別の声色が投げかけられた。

声に驚いた二人がビクつとする。

同時にライトが当てられて、その光の中に異形の赤が据えられた。

まるで刻が止まったかのように硬直する。

しまった――

「く、苦しい」

羽柴が白々しく声を荒げ、咳き込む。

大げさに倒れこみ、レスキュー隊員の足元にドウと転げた。

――注意を逸らすしかない。

それを察した霧凧が翻し跳躍する。

瓦礫の重なり合う隙間にその異形の躯体を滑り込ませた。

見られたか…

レスキューの二人は羽柴に駆け寄り、通り一遍のセリフを並べた。

両腕に抱えた少女に酸素マスクを当て、羽柴を肩で抱える。

そして云った。

「DUSTです。悪魔憑きは3名確認しています」

ハツとする羽柴。

「ご安心下さい。空港の消防班は我々です」

これを聞いて安心するどころか羽柴の機嫌が損なわれた。

「めっえ、それを早くいいやがれ！」

鎮火が進み、炎も粗方収まると、辺りには焼け焦げた後の二オイが
経ち込め、

白い煙が狼煙のように昇るだけとなった。

機内の確認と、事故の調査班が入り込み、さきほどコントロール
ームにいた

警察の人間も集まりだしていた。

現場は惨状に反し、音も無く静かで、業務を遂行するプロの動きだ
けが散見された。

「本庁の人間以外は関係者だけです」

監督主任が羽柴に近寄り、そう報告する。

顔についたススを拭おうと女性看護師が近寄ると、これには態度を
和らげる羽柴がいた。

「聞いてねえぞ」

しかし不満はストレートにぶつけた。

現場主任は申し訳なさそうに首を垂れるも、実に事務的でそっけな
いものだった。

「大統領機というのも聞いてねえ」

「我々もです」

そうとだけ答える隊員を羽柴はそれ以上怒鳴らなかった。

いつものDUSTのやり方だからだ。

じつに組織と言う体裁に忠実だ。

気に入らねえ、と独り言を加えるもせいせいしない。

「秀長」

ぬるつと膝小僧に感触を覚える。

黒い粘りある液体が脚にはりつくと、そばに四足が寄り添った。

「イ又つころ、ばあっ！ てつめ油まみれじゃねえか」

意にも介せず薄汚れたハスキー犬が又ウと顔を突き出した。

羽柴がギョっとして顔を引き上げる。

「生きてる者はおらぬ」

「あほう。んなもんいるか」

「そうではない」

「なにが」

「生きてるはずの者がおらぬということだ」

羽柴が油を拭うタオルで思わず額を拭いた。

真っ黒になった顔を上げる。

「悪魔憑き2人は始末した。3人はDUSTで確保した。まだいるのかよ」

「何も悪魔憑きとは云うておらぬ」

羽柴が呆ける。

「いるべきはずのところにいるべき者がおらぬというだけぞ」

残り火がパチパチと燦る残骸の中に、赤い異形がいた。

甲虫の様な腕でひっくり返ったシートを軽々と放り出し、開けた場所を探る。

遺体からは手がかりになるようなものは見つからない。

どうやら警護の者以外は搭乗していなかったようだ。

墜落の衝撃は相当のもので、情報機器はことごとく粉々になり、サルベージは困難を極める。

だがウォーコイトのデジタル情報への親和性がそれを可能にする。

断片的に形状を保ったディスクにアクセスし、その情報を読み上げる。

「盗聴するより難しいな……」

心もとない独り言を洩らし、昆虫の触覚のような器官をディスクに当てて静かに精神を統一する。

幾ばくかの時間が過ぎ、その恐ろしい見た目にぞくわないたため息をついた。

ダメだ。機械をコントロールするのとはやり方が異なる。情報を読むことはできてモデコードするには処理能力も求められる。霧県にはそこまでの力は無い。

とはいえ半壊したディスクが乗員の確認に使われていることぐらいは確かめることができた。

何かの手がかりになるやもしれない。

「ふむ、東洋の悪魔憑きというのはずいぶん小柄だな」
ビィヒャン

水平に衝撃波が飛び、その高さより上のものを薙ぎ払った。

シートから外壁、天井、窓を残った窓を粉々に砕き、四方に飛ばす。粉塵が吹け上がり、パラパラと破片が落ちる。

ギルルルウ

怪音を唱えながら勝ち誇ったかのように身震いする。

灰色の影がゆっくりと現れ、赤い異形の立っていた場所を奪った。

コツツ――

そのつま先に動物を模^{かたど}った玩具のようなものが当たった。

「小さいものって見失いやすいんです」

声がるやいなや、今度は垂直方向に衝撃波が落ちた。

機体の床をぶち抜き、底板を跳ね上げる。

それを後ろ宙返りで避け、灰色の影が床ごと座席シートを蹴り上げた。

これには避ける場所もなく、赤が叩き飛ばされる。

短い鳴咽が発せられ、ドスンと肉を挟み潰す鈍い音がした。

寸時音も止み、チャリツという甲高い足音が次に鳴った。

赤い異形の手からディスクがこぼれ落ち、カランと音を立ってクルクルと回った。

それが止まる前に灰色の影がスッと手を伸ばす。

ギルルルルウ

怪音が木霊する。

雄たけびを挙げた怪人は、しかし手にしたディスクを赤い異形の足元に放り投げた。

朦朧とする意識でそれを見る霧凧のウォーコイト。

激痛から小さな震えが止まらない。

突然、強烈な空気の圧が広がり、細かい塵を吹き飛ばした。

追いかけるように轟音が連続して畳み掛け、薄っすらと影が覆いかぶさった。

ただでさえ薄暗い機内が暗い闇に閉ざされる。

その闇に溶け込むように灰色が一部、また一部と身体を隠していく。それがすっぽりと呑み込まれる頃になってようやくと霧凧を呼ぶ声がした。

それを彼が聞き取ることはなかった。

頬をはたく手のひらと冷たい水を感じて目を覚ますと、そこは戦いのあった場所から少し離れた機外の開けた空間だった。

霧凧はいつのまにか人の姿に戻り、フカフカの毛皮を枕に空を仰いでいた。

朝焼けの冷え込みが身に染みるが、空の青は心地よかった。

「ゲンザブロウ……」

ハスキーの大きな身体に手を伸ばし、ひと撫でするとそっと上体を起こした。

痛みに顔が歪み、思わず歯を喰いしばる。

ゲンザブロウがその顔をヒト舐めして労わる。

霧凧がふっと笑った。

そこに影が差したので思わず見上げると、腕を組んで立っている羽柴が目に入った。

こちらからは羽柴の横顔しか見えない。
彼は緊張した面持ちで何かを見据えていた。

その上空からロープが垂れ落ち、屈強な男たちが降りてくるまで数秒。

軍装に身を固めた彼らは降りるなり銃を構え、素早くフォーメーションを固めると、

その内の数名が一度に銃口を突きつけた。

「動くな」

云われなくとも動ける状態じゃないと霧島が反骨心むき出しに睨む。彼らはそれを微塵も受け止めず、職業的な乾いた表情で顔に狙いを定めた。

羽柴にも同様に。

兵共が制圧を完了すると、次にこれを投入したヘリ、ブラックホークが降下する。

無駄なく手近なスペースに着陸すると、間髪入れずにその扉が開いた。

タラップが降り、ロングブーツが軍靴の音を響かせる。

長い黒髪をローターのリズムになびかせ、背の高い女が1人、雪残る滑走路に降り立った。

凜とした姿勢が気高さを表し、きりりと結ばれた唇が気の強さを連想させる。

まっすぐこちらに歩いてきて、瓦礫の小山を乗り越えると羽柴たちの前に立ちはだかる。

見下ろし威圧し、空間的支配権を主張した。

手にした短い鞭をしならせ、ヒュンヒュンと回しては焦らす。

これに羽柴が耐える。

我関せずといった顔で、切り出すタイミングを見計らう。

その喉元に鞭が当てられた。

「子供の来る所じゃないねえ、坊や」

女が仕掛ける。無表情のままに。

「飛行機が好きなんでね」

ふてぶてしく羽柴が返す。

「だったらおもちゃで遊んでな！」

ガツンと急所を蹴り上げる。

たまらず前のめりに倒れ、羽柴が転げまわる。

その様子を嘲笑いながら、次に霧県に詰め寄った。

顔を合わせると女は口をへの字に曲げた。

「気に入らないわね」

同じように喉元を鞭で上げる。

「何がです」

「坊やたち、ほこり（DUST）っぽいよね、ホント」

そつぽを向いて艶のある声色で彼女が言った。

それを聞いた霧県の表情が強張る。

「まさかね、あなたたちのようなそう、可愛い子供が暗殺者だなんてね」

――！

「どういうことです」

意図が掴めずに霧県が聞き返した。

「しらばっくれるところなんてホント子供っていやね――、・・・」

大統領機を襲った罪、連邦に対する敵対行為として永遠に歴史に名を残すことになるわ」

じりりと兵がにじり寄る。

寒さが極まる中、気温とは無関係に脂の汗が額を伝った。

羽柴が痛みから解放されて四つん這いに回復する。

「あんたらの国はキメツケ捜査がお得意で」

羽柴がククつと肩を揺する。

「羽柴さんが言うとおりで、ええと…」

「アメリカよ」

「——アメリカ少佐、ボクラじゃありません。ボクラは…」

「あら階級章のチェックは御済みなのね」

「スパイ、ククつ…奴隷職^{スレイブ}なんてゴメンだね」と羽柴。

これを鼻で笑って聞き流すアメリカ。

「階級章はSF映画であつたから知ってるだけです。羽柴さんには無理です」

ここで羽柴がムダにむつとする。

「まあいい。お前たちは司法が判断を下す。それよりロレッタお嬢様はどちらにいらっしゃる」

「死んだよ。生きてるわけねえだろ」

羽柴が目を合わせずに云つた。

その眉間に鉛入りのトゥーが突き刺さる。

仰け反つた上半身を膝で折り曲げて、アメリカが仰向けになつた羽柴の顔面に鼻先を近づけた。

前髪をぐいと引き上げて、血まみれになつた顔をさも汚いといった不快さでねめ回す。

「ゴミ（DUST）どもが賢しい…」

ゆつくりと持ち上げる。

激痛に顔が歪む羽柴。

アメリカは左のグローブを外すと、羽柴の口に丸めて突っ込んだ。

「喋りたくないんだろ？　だつたら静かにおしよ」

「待ってください。ロレッタという方は知らないんです」

少佐が横目で霧凧を見やると、

「女の子なら1人、今救急車に乗っています」

と続けた。

どさっ

緊張を失つた羽柴の身体が土砂に崩れ落ちる。

女は血液で汚れた右のグローブを齒噛みして投げ捨てる。
それをイヌが飛び退いて避けた。

カッと牙を露出すると、アメリカを睨みつける。

低い唸り声を霧県が制したところで少佐が身を返す。

「ケダモノまで使つて。フフ、連合も地に堕ちたものだ」

と云つて霧県に向かつて、

「連れて来るがいい」と命令する。

「その前に……」

霧県が羽柴に肩を貸しながら話し始める。

何か鳥のような影がその前を横切った。

だれの関心も惹くことなく、霧県の言葉も遮ることもなく。

「お忘れではないですか」

……

アメリカがクイとあごを挙げて想にふける。

その瞳は心なしに虚ろだ。

だが見る見ると顔色が変わっていく。

一部の部下に動揺が感じられるほどに。

「そうか、そういうことか」

アメリカが口端を歪めた。

「そうですよ、少佐」

霧県が真剣な表情で上目遣いに答える。

「貴様らが、あの——」

「そう、悪魔憑きです」

どういうことですか——、とたまらず部下の1人が尋ねた。
その胸元を押し返し、去ろうとしていたアメリカの足が再び向き直る。

手にした鞭をベルトに収めると、羽柴の額に手を当て、

「男なら勲章と誇れよう」

そう言つて傷口にプツとツバを吐きかけると、衛生兵を大声で呼んだ。

そして改めて背を向け、ブラックホークへと歩き出す。

その豹変振りに羽柴が口を開いた。

「どうしたよ、あのお嬢さん……」

霧凧を伺うといつになく口許に緊張感が漂っている。

痛みに意識が遠のく羽柴は答えを待てずになだれた。

そこではつとする。

霧凧のやつ、アレを使つたな——、と。

「そうですよ、彼女には今、本部から命令が降りたんです——」
最後まで聞かずにククつと羽柴が笑つた。
だらっ——

羽柴は口角泡を飛ばし、霧凧に喰つて掛かった！

「さつさとやれよ、こんななる前によおっ——」

「迂闊にはできませんよおっ、悪魔憑きだったらどうするんです」

「だったら始末するだけだろが」

「変身が間に合うかどうかの瀬戸際ですよ、囲まれてたんですから」

「おめえ、……」

「何です——!?!」

「オレのこと分かつてねえだろ」

「??? ——— え」

たくよお、と膝を突いて羽柴がガクリと肩を落とす。

「え、ええ？ あ、ああ。でもだって、それだって相手が対悪魔憑きのエキスパートだったら、

…… だったら。いくらなんでも羽柴さん危ないですよ」

「だらっ！ 十分酷い目にあつてんだろがっ——!」

そう言つて額の傷を差し出した。

「いい加減、幸運だったと感得せい」

ゲンザブロウが諭した。

部隊の中心に舞い戻るアメリカの後ろから下士官が呼び止める。

スタンバイ状態のブラックホーク手前でようやく少佐に声届く距離まで近づいた。

足早に歩くアメリカにはその声が耳に入らない。

プロペラの風圧が衣服の裾をはためかせてますます困難となった。

大いに声を振り絞る。

「WHO（国際連合保険機構）のDUST（麻薬）と賤しまれる者などありません」

「私の手配ではない」

「でしたらお目付け役でしょうか」

「そんなところだろう、気にするな。見張っていたところで聖者の行進に手出しはできん」

Disposure of Unidentified-beings Service Team、未確認生物処理活動部隊・・・
通称——DUST。

未確認などと称しているが、その実悪魔憑きと呼ばれる変異体を秘密裏に葬り去る暗殺部隊。

それだけなら良からう。

悪魔による殺人が横行してるとなれば、愚かな民衆が恐慌に陥るは必至。

この事実は選ばれた一部の人間で遂行されるは道理であろう。

しかし問題はその実行部隊そのものが悪魔憑きから構成されていることにある。

本当に隠蔽されている事実はそこなのだ。

悪魔を倒すために悪魔の力を利用するその倫理観の欠落。

神の与えし試練において創られた子らの過ちに他ならない。

まして十代の少年やケダモノにすら頼らざるを得ないなど愚の骨頂。

それにしても奴らの仕業でないとすれば、エアフォース・エグゼクティブワンを襲ったのは一体誰なのか。

セインツ・マーチンの精鋭が同乗していればこのような失態を避けられたものを、・・・不甲斐ない結果だ。

幸いロレッタは事なきを得たものの、それで気分が晴れるというものではない。

「少佐、補佐官からホットラインです」

下士官から渡された衛星回線の端末を雑な手つきで奪い取る。

ほとんどが生返事でやり取りされる儀礼的な会話。

ものの1分もせずに切ると、少佐は受話器に向かって悪態を飛ばした。

その激昂を見てみぬ振りでやり過ぎし、部下が敬礼を以って退散する。

「借りとして馴れぬ気骨を折れば、あの男め！」

惨劇の空港に怒声が轟いた。

羽柴を背に乗せて戻ると、DUSTの主任が慌てて駆け寄ってきた。十分な防寒装備ではあったが、寒さに凍えている。

普段着でしかない霧県たちには尚更だった。

「困まりました」

主任はそれだけですは伝えた。

相変わらずの事務的な口調に羽柴が苛立つ。

どれほどマズイ状況なのかが分からないからだ。

この組織の実態の不透明度がこんなところにも露見する。

こんなとき、些細であればあるほど辞めてやると念じる機会になる。

「ハッキリしねえな、で、どうなんだよ」

「ロレッタ様を渡すよう要請しています」

「だれよそれ」

「私です…」

不意に注がれた可憐な声色に皆が振り向く。

そこには先ほど救出した少女が柔弱な様で立っていた。

必死に車両のドアにしがみつき、凍えて花唇が小刻みに震えている。
あつと思つたときには雪に半身を埋めていた。

それを霧県が抱き上げる。

「安静にしていなとつ」

そのまま抱き上げて車内に戻そうとする。

これをそのか細い腕で阻むと、

「戻らなければ、みなさんにご迷惑が掛かります…」

ハアハアと息も荒げに云う彼女。

だが目を瞑り、いかにも苦しげだった。

「筋だな」

羽柴が戻る霧県の肩を引いて、その向きを強引に変えた。

「治療はDUSTでもできます」

「軍医がいるだろうし——」

そう云つて親指を後ろに指した。

「へりもある。ウチより早い」

「ですが——」

「なんだ」

霧県が云いづらそうに言葉を途切れさせる。

「なんだってんだ、早くしねえとロレッタ嬢ちゃんがツライだろ！」

「彼女は亡命してきたんですっ！」

——！！

羽柴が驚く。

「ホントかよ」

ありきたりの返答しか出ない。

「ええ、詳しくはこのディスクに」

そう言つて半円の銀盤を差し出す。

思わず手にした羽柴はしげしげと目に翳して見る。

それで何が分かるわけではなく、

「こんなもん読めるのか」

「それがウォーコイトですから」

へえ、と改めて関心を示して霧県に… と見せて翻し、主任の方に手渡した。

「どこで見つけた」

「執務室のラップトップからサルベージしたものです」

「わかんねえよそれじゃ」

「え、あ、すいません。くせで」

「こりゃ特撮番組じゃねえんだし、うぜえんだよ」

と吐き捨てる羽柴もなかなかのものだが。

「観ましたよ、先週」

と、突如主任が割って入った。

やぶからぼうになにを——と羽柴がいぶかしむのを他所に、

「本当ですか、有難う御座います、それで…」

と話を広げようとする霧県。

これを羽柴が一喝する、いつもの光景が披露された。

「亡命を助ける筋がねえ。DUSTはそんなお涙頂戴な組織じゃねえだろ」

この指摘にはさすがの主任も苦笑いをする。

「ありますよ」

はあ！？ と、羽柴がバカにした顔で見る。

「業務拡張ならオレ抜きでやってくれや」

じゃ、とさよならの挨拶を挟んでポケットに手をつ突っ込む。

背中を向けて歩み去る羽柴。

「悪魔憑きを取り逃がしました」

「逃がしたあ！？」

ハイ、——と満足そうに霧県が答えるとその返事も待たずに頭突きをかます。

血糊を伝染し、さらに畳み掛ける。

「ナニ云ってつかわかってんのか」

「ですからDUSTの出番ですよと」

イライラが募り、二の句も出ない。

思わずコブシを握り締める。

プルプルと痙攣が止まらない。

「だらっ！ さっさと云えや、大事なことの区別もねえのか」

「正しくはやられちゃったんです」

はぁ、と仰天発言の連続に顎まで外れた。

「それで伸びてやがったのか」

そうですよ、と霧県が得意げに言う。

どうしてそこで得意げなのか。

「軍じゃねえのか」

「だから悪魔憑きです」

「だったらなんで止めを刺さねえ」

「羽柴さんが来たから……」

「逃げたってか」

羽柴がククつと笑う。

「そうか、そうだな」

「なんです？」

「ゲンザブロウが云ってたわ」

なんのことが分かりませんけど、と切り出して

「だから、彼女は渡せません」と力強く断言した。

「囷にするわけか」

「違いますよ、守りたいだけです」

そっかいと答えてロレッタに近寄る羽柴。

「と、ウチの不肖が申しておりますが――」

「……」

羽柴がうやうやしく礼をすると、ロレッタは少し身を引いた。
それを見るや、

「DUSTは何がお望みで？」

と、急に主任に向きを変えて尋ねた。

「DUSTは内紛を忌避します」

「なによそれ」

「連邦DUSTはロレッタ様を引き渡すよう打電しています」

！？――

「どういうことだ」

「我々は情報を伝えるだけです」

「興味ないって？」

即答して頷く主任を見ることなく、霧県に向き直る羽柴。

それに先んじて霧県が話しかける。

「あちらさんがお墨付きなら軍に任せてもいいんですね」

ん、まあ…と羽柴があやふやに口籠る。

「でもね、羽柴さん」

ん？ と視線だけを向ける。

「また怒るかもしれないけど――」

「んだよっ！」

ほら怒る…

「あの部隊章、存在しない軍隊なんですよ」

防寒用の毛布に包まれた担架がブラックホークに積み込まれるまでにはそれから

少々の時間を必要とした。

アメリカ少佐の不満そうな檄が飛び、八つ当たりをされる兵らが気の毒に思えた。

その背後に背を丸めた少年が立つ。

「貴様か」

アメリカの素っ気ない投げかけ。

「羽柴秀長。DUSTのエージェントだ」

「そう！？ 貴様らは用済みだ。名乗るまでも無い。帰るがいいわ」
ちつと軽く舌打ちする羽柴。

霧島のクソガキめ。もつとマシな記憶を植えつけやがってたの。

「ロレッタ様をお救いしたことに感謝する」

だが——と付け加えて、

「これから先、助力は無用」

そう言い残してアメリカは軍靴を鳴らしてタラップを足早に登る。

つたく、霧島め。記憶操作ぐらい遠慮なくやれや！

なんでこつちが下僕なんだっての。

人間がちっせえんだよ。

「少佐、DUSTへの指示を確認したい」

「クドい、退がれ！！」

ブラックホークはアメリカとロレッタの担架を乗せるや否や、ホバリングを開始した。

たまらず引き下がる羽柴。

窓ガラスに手のひらをつけてこちらを伺うロレッタが見えた。

羽柴にすらその瞳は淋しく思える。

「これでいいんだろ、だらがつ」

上昇するヘリの風圧を押し返すかの如く大声で怒鳴る。

「仕方がありませんよ」

霧島から諦めを忍ばせた、力ない言葉が出た。

「軍がどうするか分かりませんが、」

「殺すつもりなら当にやってるな」

そうです、と静かに答える霧島。それより——と続けて、

「ロレッタさんの気持ちをムダにできませんよ」

ああ、と心ここにあらずとばかり意志の無い返事で済ます。

彼女のたつての希望。

軍の包囲を解く、それが引渡しの際たる条件となった。

そうでなければ証拠隠滅つまり抹殺されかねない。

連邦DUSTに軍、連邦そのもの、この国の政治とすべてに憂慮するなら

穩便に済ますためにも彼女独りが犠牲になるのが望ましい。それがあの娘の願いだった。

「オレらと変わらない歳なのにな」

羽柴のらしくない褒め言葉が聴ける。

代償として足りるか。

戻るぜ——、と羽柴が背を丸める。

霧県はその背中にかける言葉がなかった。

後ろ髪引かれる思いが晴れず、数度と、爆音響かせ去り行く黒い金屬の塊を見ては、

羽柴が歩を緩めた。

雪上には足跡が残り、爆音と共にあつた風圧が今は彼方に去つたことを教えてくれていた。

距離が開いたことによつやつと気づいた霧県が、羽柴を数歩先で待つ。

「彼女、帰してしまつて良かったんでしょうか」

霧県が確かめても、同じように何度も首を横に振るだけだった。必要以上になされることが返つて合点のいかない気持ちを表す。

「カワイイからくれよ——ってあほか」

「いいじゃないですか、それで」

てめつ、と拳を振り上げる羽柴。

頭をかばいながら霧県は、

「身元不明の軍属なんてろくでもないんですよ」

「不安を煽るんだな」

「羽柴さんのカッコイイとこ見たいじゃないですか」

「ああ!？」

「墜落直後に到着、うさんくさいですよホント」

「到着時刻に合わせて待機してたんだろ」

「極秘にですか」

「……そりゃ知らねえが、政治を正すのがDUSTの仕事じゃねえ」

ここで目を見開いて大げさに驚いたと演じる霧凧。これに態度保留の羽柴。

「そもそも羽柴さんマジメに仕事しないでしょ」

「そんなことねえよ」

「この間だって仕事中にゲーム買いに行きましたよね」

「イベントでしか売らねえとか舐めたこと言うからよ」

「そこ！？」——霧凧が汗をかく。

「大事だろ」

「そつえばアレ、誰が好きです」

「何だよいきなり、——弓島きはるだな」

羽柴が即答する。

「え、きはるですか。意外——性格キツくないですか。ていうかミ——ハーですよね羽柴さん」

「うわ、分かってねえな。これだからガキはキライだわ。きはるのキツさは深い意味があんの。愛があれば分かるわ、フツ——」

「今度出ますよね、フィギュマ」

「3つ予約したかな」

「またショットしたらキレルんですか」

「するだろ」

「ボクの方で保険掛けましょうか」

「きはるは自分で買うから意味あるんだろ」

「絶対また買えなくて泣きつきます、きつと」

「無いね、命懸けで買うね」

「きはるは命懸けで手に入れる価値があります。——そして……
・、ロレッタさんは命懸けで救う価値があります」

羽柴が一度取り出した携帯を開きもせずに仕舞った。
起動画面のきはるは仕事の合間の清涼剤だった。

羽柴は見るのをためらった。

しばし間が開いた。

「嫁に怒られちまうな」

「何もしないで帰ったら、それこそ怒られますよ」

羽柴がいつになく背筋を伸ばしたような、霧島にはそんな姿に思えた。

漆黒の金属塊が爆音を伴って飛翔する。

海面に波紋を叩き付けて進んだ。登る朝日がギラギラと照り返し、窓越しのロレッタを焼いた。

それとて微動だにせず、両の眼でしっかと受け止める。

眩しくは無いのだろうか。

その碧いガラス玉で。

口を一の字に結び、頑なに閉ざす。

アメリカと密着する中で、まるで独りであるかのように周囲を遮る。さすがの少佐もこれにはなにも切り出せずにいた。

腕を組み、そわそわと脚を揺らす。

兵に当たる怒鳴り声も出せず、苛立ちが募る。

ついに堪り兼ねて口を開いた。

「ロレッタお嬢様、勝手が過ぎます」

思った通り、振り返りもせず、この国の朝日に見入るロレッタ。

業を煮やし、ロレッタの両腕を引く。

はっとしてロレッタはアメリカに目を合わせる。

その目に意志は希薄だった。

数秒見詰め合ってから、アメリカは諦めたようにそっと腕から手を引く。

いつもこう…

呟いたのか、思っただけなのか。

アメリカ自身にもわからない小さな声だった。

両膝に拳を打ちつけ、アメリカはしな垂れた。

小さく震えて嗚咽を飲む。

それをチラと横目で追い、正面を見据え直してようやくとロレッタは口を開いた。

「お父様は——」

ピタッと震えが止まり、アメリカはそのままの低い姿勢で聞き続ける。

「あなたの所作を許しはしません」

これを聞いたアメリカは、しかし、態度を変えた。

勢い良く身を起こすとロレッタに大きく向き直り、

「ロレッタ、良い？——」

ロレッタが眼球だけを流す。

「このセインツ・マーチンはその男の云い也にはならない」

言葉尻を強く結び、気持ちが進められていることが伝わった。

セインツ・マーチン……

ふん——

興味もないとばかりに視線を外す。

それを許さぬとばかり、今こそとアメリカが意気込む。

「そうやって自分だけが傷つけばいいというあなたを、」

呼吸を1つ、

「あなたを、——あなたのためのセインツ・マーチンよ」

息を荒げる。

興奮が喉元まで上がる。

「必要ありません」

ぴしゃっと封じる。

カアとなったアメリカが天井までその頭を掲げた。

ロレッタを見下ろし、

「あなたのためにどれほど——！」

それほどを費やして、労して、

そんな言葉を繋げるつもりだったのかもしれない。

しかしそこでゴウと全てが掻き消された。

いつの間にかスライドしたドアから大量の空気が流れ込んだ。書類を巻き上げ、視界と動作の自由を奪う。

思わず右手で遮るが、風は止まない。

そんな豪風の中でもロレッタはやはり少しも身じろぐことなく、凜と自分の席に座っていた。

「ロ、・・・ロレッタお嬢様、な、なにを」

その異和感に困惑しながらも、彼女の安否を思い、アメリカは手を差し伸べた。

このままでは地上数十メートルの高さから放り出されかねない。

己が身の危険も顧みず、一気に腕を伸ばす。

しかし、同じ速度でロレッタの身体が宙に舞った。

ロレッタ――

叫びが彼女に届くことは無かった。

「それにしてもあの悪魔憑き、何者でしょうね」

「軍票が落ちてねえんだから、派遣かなんかだろ」

「まあ、当たっていますけどね。少佐の部下には思えません、たしかに」

「墜落前のこと、覚えているか」

「青白い光、不自然でしたよね」

「配線が切れたにしちゃ派手だったな」

「すなおに云ってくださいよ、まどろっこしくないですか」

「悪魔憑きしかねえけどな。ああいうのは」

「墜落の原因は彼らスレイブ、・・・と」

「断末魔の雄叫びは至高の美酒だわあ、わーっはっはっは、――てな。いつものお約束だ」

羽柴が両腕を開いて仕草を真似る。

「だったらもつと大勢が乗る、セキュリティも甘い民間機を狙いません？」

「……、…………理解できるか。化物の考えてることなんざ」

「にべもないですよ、それって」

「オレは化物じゃねえ、就職難の若者さ」

「笑えないです」

「何が言いたい——」

「なにかあるってだけです。ボクにも分かりません」

「んめつ！　くだんねー話振ってんじゃねえよ」

「真剣に話してますよ、DUSTは大統領機に悪魔憑きが関わって
ることを察知してたんですから！」

霧県が怒鳴るように云うと、羽柴は喰い掛かろうとする勢いを殺した。

「ダンナがそれについてゲロをとでも思うのか」

「喰えませんか、羽柴さんでも」

「給料くれるヤツあ、悪魔憑きよりタチが悪い。わあってんだろ！」

「そうは思いませんけど、長官がタチが悪いのは賛成です」

「てめえの許可なんかいるかボケ」

「最初から総登場する特撮番組なんてありません」

「またそれか。特撮は見ねえし」

「あ、二十周年記念のときはやりましたけどね」

あははつと霧県が笑う。

「だら知らねってんだろ！」

「舞台に役者が揃いすぎているんですよ、始めから——」

「物好きな系引きだ、オレを抜擢するなんてな」

「ミスキャスティングできつとシナリオは崩壊です」

「癪に障るな、それ」

「良い意味で言ってます。他意はありません」

「大統領のご家族、存在しない部隊、DUSTを手玉にとるとなれ

ば限られます」

「あの女帝なら問題ないね」

「羽柴さん、ああいうのイマイチですよ」

「年増はフラグ立てないね」

「だから全ルート攻略しないんだ」

「嫁に怒られるから嫁ループ、嫁コンプがオレの主義なの」

ほどなくして、羽柴らがDUSTの元に戻ると、スタッフに加えて警視庁の人間ともが集まり、

思いあぐねている様子が目に映った。

大の大人がオロオロする様子に羽柴は関心を持たず、

背を丸めて救急車のハッチバックを開けて座り込んだ。

ふと、足元の溜まりに手をやり、その中から黒い小塊を拾い上げた。ゲーム機だ。

「てめえも悪魔憑きなのかよ」

ククと笑って電源に指を伸ばすと、変わりなく起動音が唸った。

ゲラゲラと笑いをエスカレートさせる。

ゲームに夢中になる羽柴に誰かが声をかける。

不機嫌が復活して眉間が隆起した。

だが今度はゲーム機を仕舞う。

あんだよ——と無愛想に返事をした。

「警備が解けません」

見れば分かる。

軍による包囲は続き、DUSTを始めこの事実を知る全ての人間が閉じ込められたままだ。

「ロレッタが座間に着くまでの保険じゃね」

ならいいんですが、と不安を隠す様子も無い。

ちっ、こつちが困ってるときは素知らぬ顔で、自分たちが困れば泣きつく。

大人のクソみたいな身勝手さに身の毛もよだつ思いだ、と羽柴。さて、面倒を見るかどうか。

霧県に押し付けて帰るもよし…。

当の霧県はスタッフらと呑気に話している。

バカけているぜ、とポーズボタンを開放するとセーブ画面に入った。
血の気が引く。

悪魔憑きやアメリカに一步も引かなかった羽柴の顔が青ざめる。

——消えてやがる。

セーブデータがねえ。

こんなことあるかよ。

フラッシュメモリは衝撃に強いんじゃないかよ。

意味も無く機器を振っては見るが当然変化は無い。

ああ——、と前に突っ伏すとその頭頂になにか当たった。

痛くはない。

いや、柔らかい。

見るとそれは足だった。

ひっ、と思わず身を引く。

死体じゃねえか、気持ち悪い。

じゃ、ねえか。コレ。

まだ暖かい。

ケガ人ほっというて連中ナニしてやがると毛布をめくる。

パンツがあつた。

パンツだ。

羽柴はそう呼ぶ。

洒落た言い方はしたことが無い。しいて云えばおパンツ、…か。

いやいやそうじゃねえ。

女だ。

女のパンツだ。

なんでこんなところに。

女の乗客がほかにもいたのか。

聞いてはねえが、霧県といいあいつらのレポートの遅さはおれの大学生生活の比じゃねえ。

・・・

三思しても答えは出ず、行動早しと拝顔する。
今度こそ本当に、完全に血の気が引く。

これはいつたい。

「霧県っ！」

羽柴は救急車の車内から大声で霧県を呼んだ。

すぐになんですと踊りこむ。こういときは素直なやつは扱いやすい。

「これを見る」

ぱつと毛布を剥ぐ。

霧県もまた羽柴と同じように顔色を変えた。

「羽柴さん、これは」

「ああ、・・・」

そこに横たわっていたのは紛れもなくロレッタであった。

乾いた冷気が肌を撫でることで、少女は夢から醒める。

数度左右を見、困惑した表情で緩慢な動作で起き上がるとする。

その弧をそつと抑える手があった。

じつとして――

優しい声で労わりの言葉を述べると、ふわりと毛布を掛け直す。

声の方向を見ると、そこには温かな眼差しを持つ少年が腰だめに座っていた。

低くて無機質な天井。

機器でひしめく狭い室内。

自身の状況が飲み込めると、気丈に礼を述べた。

いいんだ――と礼を受け止め、チラと羽柴を見やる霧県。

霧県がつっけんどんなままため、

「ロレッタさん、ですよね」

と霧県の方で確かめる。

こくりと小さな顔を縦に振って、これまたか弱い声でうんと呟いた。生唾を飲む音が聴こえて少女は思わず毛布を引き上げた。

臉が落ち、冷や汗を掻いた少年二人を交互に見る。

「羽柴さん、どういうことです」

「ばつくれんな」

「はあ!？」

あつけに取られる霧凧に詰め寄り、ゴンと中指の角でみぞおちをえぐった。

ぐえ——、と低い声を出すと片目を開いて抗議の意思を示す。

「ほめてんだよ、良くやった」

「??？」

「オレも騙されちまったよ」

ククッと笑う。

思い当たる節の無い霧凧は小首を傾げた。

途端、羽柴が胸倉を掴む。

「うぜえな、しらばつくれんな、長えしよ!」

「なんなんです、急にいきり立って!」

「ロレッタを丸太かなんかで作っただんたろ」

「そんな器用じゃありませんよ」

「ああ?」

「だいたいそんなもんどこにあるんです」

「じゃ、あれだ……その辺の鉄屑とか」

「無理ですよ」

……

「なら、てめえの人形か」

これにはちよつと上目遣いで天井を見るも、

「小さすぎます。離れたらどうともできません」

と答えた。

「あの——」

この様子を見ていたロレッタが話しかける。

「どうかなさったんですか」

フツと羽柴が引きつった表情を緩めた。

「お嬢さんには関係ない話っす」

「ありますよ」

即座に異を唱えた霧凧を目で恫喝する。

「私、助かって、——助かってしまったんですね」
？——

彼女はそう云うと目を瞑り、寝返りを打った。

表情は二人からは見えない。

「なにか気に入らねえか」

羽柴さんっ！ と霧凧が諫める。

・・・・・・

しばらく返事が無く、うつと身を屈める少女。

「とりあえずアンタが助かってオレは良かったぜ」

ピクンと小さな双肩が跳ねる。

さりとして返事は無い。

右の手首を握り、小刻みに震えて唇を噛み締める。

目を瞑り、小さな身体をもっと小さく丸めた。

ロレッタさん、と霧凧が心配そうに声をかける。

「——・・・・・・父は、・・・・・・」

と彼女が切り出す。

「父はこのことをご存知でしょうか」

叫びのような強い口調。

「あんたの親父か？ さあな」と羽柴。

するとロレッタは伏せ目がちに膝に視線を落とし、

「そうですか。でも今頃大騒ぎになっていることでしょうかからもう

知られてしまったでしょうね」

「静かなもんだよ」

と云う羽柴の意外な返答に金髪の少女は困惑を隠せない。

「DUSTだからな」

「ゴミが、なんですか？」

「ゴミなんかだれも関心なんか持たねえさ」

霧凧が口を挟む「報道はシャットアウトされています」。

！？――

彼女はカーテンに手を伸ばし、そつと窓の外を眺める。

朝焼けの街並みを流す車窓。

トーキョーの一種独特な街の表情にしばし見とれる。

静かな朝。

飛行機墜落の大惨事があつたことなど微塵も感じられないほどに静まり返っている。

「これが、――これがあなたたちの仰るDUSTのお力ですか」

彼女のこの言葉に気づき、

「あんだ――」と羽柴が継ぐ。

「ご存知なんですか、DUSTを」

霧凧が訊いた。

「ハイ、・・・いえ、この目で見るまでは信じておりませんでした」
カーテンを閉じ、二人に向き直るロレッタ。

「無我夢中に、藁にもすがる思いで日本を目指した、・・・いいえ嘘ですね。そんなのは嘘です。自分の国から逃げたかった、お父様のそばから離れたかったんだわ」

いつしかそれは彼女の独り言のように変わっていった。

「そのためならと傍若無人になつてわたし、あの人の云う事を鵜呑みにして――」

目じりを滲ませる。

「二度としないと誓つたとしても、神は試練から逃れることをお許しにならなかった」

ロレッタは右の肩を落とし、科を作り目をそむけた。

そのちよつとの力で、焼けた髪留めが解け、両のテールの1つがほだけてハラリと垂れ下がる。

美しい横顔が彼女の抱える淋しさを際立たせた。

彼女が禁忌とするしがらみ。

それがその手首の紋と気づくまでに時間は要らなかった。

だがそれを二人は口にせず、代わりに霧県が云った。

「試練の大きさはその人の大きさでもあるんですよ」

ロレッタの震えが止んだ。

霧県の暖かい眼差しに視線を重ねる。

「いえ、すいません。お嬢様のことも知らずに――」

「だな、偉そうによ」

「そんなつもりじゃ、」

「お嬢さんの試練もご大層だがまずは検問を突破するのが試練なんじゃないねえの？」

たしかに。軍が包囲網を開放し、DUSTの撤退を許可したとはいえ、

ロレッタがいるとなれば話は別だ。

「それによ、――」と云って、

羽柴はすくつと立ち上がる。

「どこ行くんです――！」

霧県も後を追って立つ。

「だらつ！ 助けに行くんだよ」

え！？――

「誰をです？」

「ロレッタだよ」

「?? お嬢さんならもう――」

羽柴の双が見開かれ言葉を遮る。

「クソイ又ってんだよ！！ ドマヌケ」

羽柴が出て行ってからすでに十数分が費やされた。

遅い戻りに霧県が落ち着かない様子で立ったり座ったりを繰り返す。

ロレッタの様態は安定したものの予断を許さぬことに変わりはない。早くここから脱出し、病院へ向かいたいのだが。

はたして行動した方が良いだろうか――。

そうやって考えあぐねている頃、漸く羽柴が帰ってきた。

そのそばに霧凧が駆け寄る。

羽柴の表情は暗い。

「抜け道が無いとは云わねえ」

「まずはこう切り出した。」

「問題でも？」

「だらつ！ 怪しまれっだろが」

ああ、とあまりに当然のことに平たい口調になる。

「それにDUSTの連中が大勢いるんだ、人質に取られているようなもんだ」

「ですね」

「ですねってよお」

「え、ああ、すいません」

とろくさい霧凧に苛立って、腕を組み、とんとんと指で肘窩を叩く羽柴。

「半端に散ってるからよ、例えオレでも気づかれずに倒すのは難しいわ」

「できますよ、相手は普通の人ですよ」

「そうはいかねえ、アーミング・ダブレットと来たわ」

――！！

アーミング・ダブレット。

連邦装備の戦闘用小型装甲の一種で、戦車並の火力と小型車並みの機動力、厚い装甲を有する最先端兵器だ。表向きは戦場の兵士が生還することを願って作られたと表されているが、実際のところは対悪魔憑きの研究がもたらした恩恵と云って差し支えない代物だ。

それが――

「7体はいるというんですね」

「ああ、こっちは二人。DUSTのお荷物ドモは頼りないと来てる」
「応援を呼びましょうか」

「傍受されっただろが」

「ここでううんと悩んでしまう。」

「傍受するならさせればいいんです」

「ああん!?——と片方の眉を跳ね上げて、羽柴が目をむく。」

「眠たいこと云ってんじゃねえぞ」

まあ見ててくださいと羽柴を制し、携帯電話に触覚をアクセスさせる霧凧。

ビビビッビギョーン

同時に全身から棘が飛び出し、着替えたばかりの服を切り裂く。

うつと小声を洩らしてやや前かがみになると、胸を苦しそうに押さえて痙攣した。

「だ、大丈夫かよ」

羽柴が思わず心配する。

呼吸を荒げて、背中を大きく上下させながら手のひらでこれを阻み、

「いつものことですから」と平気な素振りを演じる。

顔の崩れた醜悪な姿のまま、急ぐ様子で携帯を操作した。

同時刻。

通信機からの声を正面玄関で待機していた兵員の1人がキャッチした。

「DUSTが動きます」

敬礼して上官に報告する。

上官と思しき男がこれに応じ、書類をめくってサインを加えた。

「本部からのCOVCOMです」

「COVCOMだと?」

コード照会は一致。

疑問を挟む余地も無く伝令内容を確認する。

「軍曹、至急アーミング・ダブリットをブラック・ホークに召集だ」

軍曹と呼ばれた青年が敬礼をし、すぐさま通信機で部隊に連絡する。上官の男はそれに付随する細かな指示を与え、

ほかの者には検問の続行と配置の変更、警備レベルの変更を促した。「撤収にはどれぐらいかかる」

「数十秒もかかりません、大尉」

「少佐の方で人数が必要になったようだ」

「何事でしょうか」

「それは伝えたくない様だ。私もすぐに戻る。DUSTの連中を早く撤退させて貴様もすぐに戻れ」

ハッと小気味良い返事を遣し、軍曹が退がる。

そこへDUSTの車両が到着した。

手にした誘導灯を振り回し、車両を一列に整えて手際よく送り出す。「ゲームシヨも見習って欲しいな」

その最後尾の救急車両の中で羽柴が呟いた。

なんです、と訊く霧県を無視する。

窓から様子を眺めると、警備兵が前の車両を覗き込む様子が伺えた。「大丈夫なんだよな」

え——、つと不意を突かれた霧県が手にしたものを落とした。

薬の錠剤がコツと床に落ち、慌てて拾う。

「ため、それ！」

と、羽柴が霧県の探る腕を妨害して、自分の方でカプセルを拾い上げた。

それを眼前に押し付けてこう云った。

「変身する気満々じゃねえか！」

「あ、いや」

しどろもどろになる霧県を気迫で押し切る羽柴。

「ちゃんとやりましたよ、ただ——」

「ただあああああん!？」

「特撮でやってたことだから自信なくて」
「はああん？」

と、声とも喉の鳴るとも区別できない音で霧県を襲う。

「特撮だあ？」

「でもあれ、アドバイザーが紀氏那賀さんだから――」

「知らねえよ誰だよっ！！ それよお」

「傭兵ですよ。南欧の黒虎、別名――」

「最初から別名じゃんか」

問答を繰り返すうちにすぐにも順番が回ってきた。

とつさに打ち合わせをしていた位置に戻り、今度は小声で乱戦を続ける。

「何吹き込んだんだ、言ってみろ！」

「COVCOMに乗せて検問レベルを1ランク下げたんです」

「分かるように云えよ」

「さっきアメリカ少佐絡みでいろいろとコードを手に入れたから」

「試したのか」

「いえ、解読はできません」

「なんだそりゃ」

「だから本当のやり取りに、命令の内容を加えただけです」

「そんなヤバイ賭けに乗ったんか」

「賭けじゃないですよ、変身は保険です」

霧県は少し不機嫌そうになった。ちよつとは信用して欲しいと思うが故だ。

「実際に軍は撤収します」

「都合よくかあ？」

「理由なんて知りませんよ」

「逆ギレすんなっ！」

アタマをグリグリと掴んで締める。

イタイですよと霧県が抗った。

取っ組み合う二人の視線の先、窓越しにアーミング・ダブリットの脇腹が見えた。

慌てて姿勢を低くする。

「見つかったらどうすんだ」

「そうだったら羽柴さん、頼りにしてます」

「ぜっんぜんカワイクねえ、男なんかカワイクねえ」

チッとロツクが外れる音がした。

窓からは兵士が1人覗き込んでいる。

バックドアが跳ね上がり、外の明るさが室内を満たす。

がさつな動作で男1名が立ち塞がり、銃を振り回して脅しとも思える強い当たりで捲くし立てる。

るせえな——と教師に逆らう態度そのままに羽柴が仰け反って挑発する。

これを気にも留めず、事務的な手順で確認を進める。

その手が担架の毛布を捲るようにと指示を出した。

緊張が走る。

羽柴が動揺したのがかくかくと手を震わせてしまった。

これを不自然と捉えたのか兵士が銃を構えて威嚇する。

もう1人の兵士が駆け寄り、ついでアーミング・ダブレットを手招きした。

万事休す。

わずかに沈黙した後、ゆっくり毛布を捲るようジェスチャーをし、これを了承して羽柴が毛布を掴んだ。

兵士たちの顔が驚きに変わる。

「ノー！」

顔の見える兵士二人が背けるようにして口を塞ぎ、吐く真似を繰り返した。

下品な言葉を浴びせて早く去れと罵る。

バックドアが素早く閉められて救急車が加速した。

後ろの窓からはこちらを指差しバカにした喚く兵士が見える。

アーミング・ダブリットまでパフォーマンスをする始末だ。

「巧くいったわ」

羽柴が満面の笑みでガッツポーズする。

「納得いきませんよ」

「去年もやってたじゃねえか」

「今年やると決まったわけじゃありません」

「やるつて、絶対」

「断ります」

「お前にはむりむりい」

ああ、もうつとむくれて服を脱ぐ霧凧。

黒のフリルスカートに引き締まった筋肉質の上半身が異様な雰囲気
を醸し出す。

「お済みでしょうか」

前の席から差し水のような冷静な声が掛かった。

「ええ、もう安心です」

「霧凧さん、申し訳ありません」

「い、いえそういう意味ではありませんよ、ロレッタさん」

そう呼ばれるとくるりと愛らしい顔をこちらに向けた。

彼女はハンドルから手を離し、前など振り返りもしなかったが、
車はかなりのスピードで挙動を維持して走り続けた。

そして救急隊員用のヘルメットを脱ぐと、美しい長い金髪が露にな
った。

髪は白衣に掛かり、1本1本ほぐれて広がった。

ロレッタの膝元には龍を象つた赤い無機質なフィギュアが鎮座して
いる。

「すげえバカにしてたな、あいつら」

霧凧はむつとして返事をせず、元の服へと着替える。

「毎年やってらっしゃるんですか」

ロレッタが訊いた。気遣いのつもりだった。

「ち、違いますよ。やだな、聴いてたんですか」

ええ、と頷く。

「去年というのは、ええと、前の番組です。なんて言ったらいいの
かな。でも主役はボクじゃなくて、」

羽柴は興味を失い、またしてもゲームを始めていた。

モーターの回転数が落ちるリズムが停止する前に、小さく跳んで降りたのはアメリカだ。

その早い調子で急ぎ足に事務所へ向かう。

これを見送ってほしくなくヘリのローターが停止する。

早朝の座間は静謐に包まれ、アメリカの掛け声がより遠くへと響いた。

矢継ぎ早に部隊へ指示を飛ばし、それぞれに異論と抗議の意見を述べられては

機嫌を損ねるだけであった。

「忌々しい、事故から救い出せた矢先にこれだ!!」

少佐の気分は底に達し、ガラス窓がその犠牲となった。

寒風が入り込むと、それが自らへの仕打ちとばかりに苛立ちを募らせる。

「ええいつ!! あの子なら無事には違いないが、クソっ!!!」

金切り声が四方を切り裂き、落ち着くまでの数十分間を支配した。

その頃合を見計らって、男が独り乗り込んだ。

馴れた筈の部下でさえ怯えるこの部屋に、堂々と、しかし流れるような身のこなしで荒げた空気に逆らうことなく均衡を奏でながら。

その巧みな有り様に感心を覚え、アメリカがこれを看過する。

「貴様か、マッキンジー」

「マドモアゼル——と、切り出し、

「少佐、ご気分が優れないようですが」

「気に喰わんな、その卑屈さ」

鞭を両手に、きつい弧に歪めて目を細める。

「とんでもありません、相応の価値があります」

「そのようだな。セインツ・マーチンは貴様如き——」

「、に玩具にはされない、でしたな」

その慇懃無礼な態度に嫌悪を覚えて、対面を避けるアメリカ。執務室を退室し、廊下に出る。

男が続く。

「恩を売るつもりなど滅相も御座いません」

「それこそ押し売りに思えるが？」

と言うアメリカの嫌味に対し、ハハと軽妙な明るい笑いを置いて、
「むしろ礼を申し上げねばならないのは私の方です」
と頭を下げる。

「なんだそれは」ぶっきらぼうな彼女の問い。

「東洋のしきたりに習いてございます」

「虫唾が走るな」

「思し召しのままに」

アメリカの歩調が早まる。並んで歩くことさえ鬱陶しいといったあからさまな態度だ。

無理に合わせずにマツキンジーと呼ばれた男、少し退がりながら、

「お嬢様にはアメリカ少佐も手をお焼きで——」

ピタッと足を止め、アメリカが射るような視線を与える。

「それを云うな。不愉快だ」

男は動じず——それにも慣れた様子で、

「マドモアゼル、今日お伺いいたしましたのは贈り物があつてのことです」

「——なにを呑気に。状況が呑み込めていないようだな」

「お忙しい身分と存じます」

「貴様こそ執政を怠り何する身ぞ」

これには頬を緩めて、

「大統領がご健在な内に私の用は無いとのことですよ」

と、腕を回して礼を行う。

そう聞いたアメリカは哄笑を鳴らした。

「傑作だわ」

アメリカは男に指を向け2度、3度と振る。

「光栄です——、と男が微笑する。」

「で、どうすればいい。世俗のクリスマスなぞ関心はないが」

伏せ目がちなままアメリカの問いかけを聴き、パチンと指を鳴らした。

その音より早いか、部下が二人敬礼をして手前に立つ。

二人係りでようやくと持ち上がるそれはずぶ濡れて床を水滴で浸す。アメリカの眉間が縮まって、壁にかけた手の指でコツコツと音を鳴らした。

明らかに不満の意味を放つ。

「バカにしてるのか」

ドサリとそれは床に放り出され、ゴロリと半回転して少佐の足元に届いた。

「もう少しお喜びになるかと——」

面を上げて、

「お嫌いでしたか？」と、マツキンジー。

「面倒は好かぬ。私の愛情は生憎先約がおってな——」

「存じております」

視線が交差する。

「回りくどいな」

「至りませんで……」

グルンと革靴で贈り物を回す。

ニヤリと笑い、

「お嬢様に御座います」

！

キッとアメリカが刺すような視線を放ち、

「侮辱するか、マツキンジー。ヤキが回ったな」

銃口を喉元に突き上げる。

それには微塵も動揺を見せず、

「私も冗談は好きではありません」

彼はそう述べるところ付け加えた。

「よくご覧下さい。お知り合いのはずです。ロレッタ様ほどではありませんが」

と、不明瞭な言葉を紡いだ。

その曇りない目を信じてアメリカが改めて足元のぐしょ濡れたそれを眺める。

「これがロレッタだというのは」

銃をホルスターに収めるときびすを返し、自分の席に戻る。

もう一度コツコツと壁を叩き、

「なるほどな、補佐官殿は政治だけがお仕事ではないようだ」と云った。

丁寧な礼を返して、

「お褒めに預かりまして」と応える。

「私とて良く知らぬが、このモノ、覚えておるぞぎりりと歯ざしりする。」

「畜生の分際で私を謀ろうとするとはな」

そうですとも——と言いかけてこれは引っ込める。

「相応の報いを知らしめてやろう」

アメリカの歪んだ情熱がふつふつと湧き上がった。

「大統領選の真つ最中か。ロレッタの親父さんもご苦労なことてラジオから聴こえるニュースに羽柴が感想を述べた。

「こんなときこそお嬢さんが必要だと思いませんか？」

霧島が世の不条理を説く。

「るせえ。生意気なんだよ」

「また負けたみたいですよ——」

「なにが」

「南部では負け続きみたいですね」

「何州が北か南かなんて知るか」

「でもDUSTには大事なことです」

それを耳にしてダッシュボードから羽柴が身を起こす。

「聞き捨てならねえな」

「聞き捨てしてたんですか」

いいからよ——と霧島の耳を引っ張る。

痛てて、とその手を払いのけて、

「DUSTにはこっちの・・・スー・フンディオ候補の方が都合が
いいですよ」

「分かんねえな、お嬢さんを迎えに行けって話だったろ」

「軟禁でもするつもりでしょうか」

「おいおいハンパねえな、——片棒担ぐ気はねえぜ」

「辞めます？ この会社」

「オレあ社員か」

「似たようなもんです」

「世界政府の公務員様だぜ」

「云ってて恥ずかしくありません？」

「けどよお、と口籠る。ブツブツ、ブツブツ・・・」

「羽柴さん、ゲームに金使いすぎですよ、だいたい・・・」

「カードの引きが悪いと金掛かんだよ」

「知りませんよ。パワーカードで勝って嬉しいんですか？」

羽柴がニヤリとする。ははあん、・・・としたり顔で霧島を凝視した。

「なんです？」

「悔しいんだろ、負け続きで」

「ないですよ、そんなの」

「お前、自分自身で負けたもんな」

「もらったから使ったまでです」

「番組スポンサー様から！？ おまえだって卑怯くね？」

「卑怯じゃないですよ」

「つぶやく!」

そう言つて羽柴は携帯を開いた。

やめてくださいよと霧県がハンドルから離れた手で妨害する。それが返つて羽柴の歪んだ情熱を焚きつけた。

文字を打ち込み、読み上げる。

「特撮ヒーローの、人が、・・・おもちゃ会社からタダで、」

「信じませんよ、だれも」

「、勝ちまくり、と。子供マジ泣き――」

「ちよつと！ なんですそれ！！ 相手羽柴さんじゃないっすか」

羽柴が意地悪く笑い携帯電話の取り合いゲームに誘う。

「大事の前にもう、やめてくださいよ」

太陽が西のビル群に身を沈める頃、関東南部に位置する広大な基地、座間キャンプを横切る幹線道路の脇に一台のワンボックスが停車した。

極ありふれた外観。ハザードランプを点滅させている。

薄暮の明るさが車内の様子を隠し、さしあたりの休憩に見える。

その窓から首を出し、基地の方を見る者があつた。

窓辺に腕を組み、いかにもダルいといった感じでうな垂れる。

腕組みを解くと、次に携帯のレンズを基地に向けてシャッターを押した。

2枚、3枚と撮影。

すると車内から呼ぶ声がした。

「羽柴さん、あからさまじゃないですか」

ちよつと頼りの無い言い方が、遠慮と諦念の混ざつた彼の複雑な心情を表す。

カーナビから流れる音楽を止めると、

「それって役に立つんですか」

と好感の持てない調子でぶしつけに云つた。

「さあな」

予想だにしない返答にまごつく霧県を尻目に、

「トモダチに送んだよ」

と保存しながらしゃべる羽柴。

「トモダチ、いたんですか？」

と霧県が云うと斜め後ろに向いて脅しの一瞥を浴びせた。

「なら、ブログにでも載せっか」

これには絡まず、霧県は自分の側の窓から、反対側にも見える基地の様子をつぶさに観察した。

それは高いフェンスに囲まれ、場所によってはカメラによる監視もなされた厳重警備によって護られた治外法権の地であった。

ため息を1つつき、

「こんなのホントに相手にするんですか？」
と訊く。

羽柴は無下に頷いた。

「DUSTの連中は加勢する気もないのはなんですか？」

「金が無いんだろ」

「そついうのはちょっと……………」

霧県が苦笑いする。

「それもあるが、——」

「あるんですか、ははっ」

「戦争するわけにはいかないだろう」

「そりゃそうですね……………」

羽柴は双眼鏡も取り出し、ねんごろに左右に回して偵察をする。

もう呆れて忠告する気にもなれない。

「そのための悪魔ですから」

「安っぽくありません!？」

「実際薄給だろ」

「それもそうですね、上手くないですよそれ」

「まじめに言ってるんだが」

ああそうですか——と投げっぱなしの返事をして、霧県は頬杖に頭を委ねる。

「行くぞ」

言うが早いか車のドアがボタンと鳴った。

「ちよっと、何も持っていないつもりですか？」

「どうせ脱げちまうんだ、気にすんなや」

そうは言ってもと霧県が装備一式入れた背負いを腕に回してその後を追いかけた。

道路沿いの煤けた歩道を歩き、5分も行くと羽柴が双眼鏡で空を数度仰いだ。

不思議そうにする霧県にバカにした顔つきで言う。

「ウオツチャーだよ、軍マニだ」

ああ、と納得する霧県を置いて羽柴が監視カメラの死角に滑り込む、
「フアランクス・アイガイオン 変身っ！」

独特の気だるそうな演舞を見せ、羽柴が閃光に包まれる。
複雑な弧が交叉を終える。

全身に流麗なラインが浮かび上がり、肉と同化した鎧が覆った。

いなやにわかに跳躍し、軽々とフェンスを飛び越えたと、

向こう側の木々に身を潜ませた。

遅れじとばかり霧県も両の腕にて陣を描き、呪詛を唱えて屈み叫ぶ！

「ウォーコイト・ミルメック、変っ身！！」

ゴオと空間が揺らぎ、炎火の如きオーラが走る。

重金属の光沢をギラギラと照り返し、赤い悪魔が再臨した。

ギシャアッ！――

表現しがたい奇鳴を挙げ、垂直に浮かび上がるとこれも垣を乗り越え基地内部に易々と入り込む。

「さあて、クソイヌのンコ拾いすんのが飼い主のマナーってな」

「そういうの品が無いですよ、キライです」

ケケっという笑い声をその場に残して二体は闇に紛れた。

それより遡ること半日――。

肉球を静かに載せたキャビネットの微かな音で、その少女は目醒めた。

救急車のドライバーは他のスタッフ共々救出作業に向かっている。今この車内の中にいるのは担架に横たわった美しい顔の金髪の少女と、

白と銀のコントラストが特徴的な巨軀を駆るイヌだけであった。少女が目覚めたことを察知したこの獣ではあったが、このとき彼女の様態のことまではよく知らなかった。

それよりも同じニオイを感じ取ってしまったことに驚き戸惑っていた。

「誰なの」

消え入るような小さな問い掛け。

獣はこれまた静かに担架の横に設置されたシートに飛び移ると、少女の横顔を覗き込んだ。

生暖かい息が掛かるほどに近く寄せて、イヌの真似事をする。

その頬を柔らかな掌で撫でる。

体温は下がり、ぬくもりは感じられなかった。

「温かいのね」

くうんと癒わりの気持ちを含めた鳴き声で彼女を励ます。

「いいえ、ちがうの」

彼女は獣をさすりながら続けた。

ふと瞼が下りて、目を一度閉じ、薄っすらと目を明けた。

「お願いよ、私を殺してくださいませんか」

吃驚に身を揺るがし、迷いもあったが語りかけることを選んだ。

「何を以ってそう請う、手弱女よ」

そう尋ねると、少女はわなわなと震えながら唇を噛み締めた。
やつのことで口にした想いではあったが、聞き入れられる訳もなく、忍苦尽き果てた。

「泣くでない、悪魔憑きの子よ」

ゲンザブロウが舌でロレッタの涙を拭う。

「ごめんなさい——」

「事故が因果たるに思えぬ左様、話せば心安かろう」
なにから話してよいのか——

彼女はしばし困惑気味に空を仰いだ。

これをゲンザブロウはじっと待つ。

残りの涙を手の甲で掬い取ると、おもむろに最初の言葉を切り出した。

「人々が父を必要としています」

そう述べた。

あまりに唐突で距離のある理由に、まだ生まれてひととせの獣にはつばさに理解しかねるものであった。彼女は続けた。

「世界が悪魔憑きとの聖戦を避けられぬ今、人々を主導し、督戦する者を神が遣わしになります」

「—— 汝も助力^{うぬ}となろう」

ゲンザブロウの箴言に対し強く首を振る。

「悪魔が天使の助けにはなりません、それどころか——」

ついに耐え切れず、顔を抑えて少女は慟哭した。

その泣き声に濁りながら、

「もし…… もしも——わたしのことが知られたら、父は失墜し、世界は悪魔の手に陥ちます！」と。

止め処なく零れる雫を、今度は思うがままに流すよう見つめる。

獣が人の子にできるただ1つの思いやりであった。

「かように澄んだ紅涙、魔道ならざる証なりと……」

きびすを返し、ゲンザブロウは素早い身のこなしで車から降りる。

これを心細く感じたロレッタが呼び止めると、

S N O W D U S T

「御尊父の元に帰るが良い。そなたに塵積もる雪は似合わぬ」と遺し風雪に身を投じた。

その寒風が傷口に染みる気がして、ふと瞼を開いた。

——ゲンザブロウは血反吐の海に身を横たえていた。
かろうじて息はある。

白と銀の誇らしい毛皮は今や竊^{やっ}れて張りを失い、
べつとりと赤黒い粘液が纏わり着いて異臭を放っている。

ゼエゼエとイヌの呼気を続けるも、焦点は虚ろで、全身が弛緩していた。

身体のおちこちの傷からはおびただしい血が流れ、もう間もなく訪れるであろう死を約束していた。

傍らにアメリカとマツキンジーを配し、対悪魔憑きの装備で固めた兵士が大勢で囲んでいる。

広くも狭くも無い倉庫の一室。

天井だけが高く、ゲンザブロウの空間認識を低下させる。

「畜生の分際でもコケにしてくれたね」

凡庸な言い回しを披露しながら、ゲンザブロウの周囲を均等な距離で歩く。

ピシリと鞭を鳴らし、

「罔となるか、質となるか……」

睨み降ろす。

「イヌ一匹に組織が動くのも愚」とアメリカが考える仕草をする。
ゲンザブロウは意識せず片目だけでアメリカと視線を合わせた。

「死ぬか、喋るかだ」

その眼に鞭先を据えた。

ゼエハア

「イヌの姿ではしゃべらぬか、のうロレッタ——」

バシビシッ！！！！

ギャウと短い悲鳴が響き、反射する。

「よりによって私のもつとも癪に障る姿に化けるとはなっ！」

何度も打つ、何度も何度も、何度も何度も。繰り返す。

血の湖を広げる。

「アメリカ少佐」

引きとめようとするでもなく、マッキンジーが呼びかけた。

彼女に飛沫した血をハンカチーフでそっと拭い、

「あちらから御出での様ですよ」と諫言する。

部下のやり取りに不審車の確認が報告されたのを聴き逃さず、

「情に脆い方々の方です」

と、感心の笑みを浮かべた。

これをくだらぬ——と制し、

「DUSTもたかが知れる、我々と渡り合うような組織ではないと
いうことだ」

「さりとて軍の情報網から逃れる程度の知能はお持ちだ」

つかの間考えて、

「人智を超えた悪魔トモの巣窟ぞ。隠さずとも知れ渡ることがない
ということだ」

このアメリカの返答にマッキンジーは肩をすくめて驚く。

「セインツ・マーチンを以てして、でしょうか」

「恥を掻かせたいか」

ノンと首を横に振り、
「スパイが生きて帰れないのはお互い様です」
そう云って邪悪に口を歪めた。

広範な敷地をあてもなくうろつくのはリスクが高いと、霧県は羽柴を引き止めると、
つるべ打ちに警備の兵を薙ぎ倒した。

全員をぶっ倒すつもりかよ——と茶化す羽柴を相手にせず、
これをムッとさせたままで、
「マインド・コントロール」
と唱えた。

ビリッと小さな稲妻が腕から走り、倒れている数名の警備兵の身体を痙攣させる。

羽柴を茂みに押し込んで二人は隠れて様子を見る。
意識を失っていた兵士たちがやがてふらふらと立ち上がると、
二言三言会話した後に揃って歩き出した。

「追います——」
「待てよ、ゲンザブロウがそっちにいるって？」

面倒といった素振りでコクリと頷きながら静かに移動を開始する霧県。

こいつはこういうときに必ず余裕が無い、と念じ
「あいつらは？」と尋ねた。

「少佐から緊急招集が掛かったことになっています」
なる——と応じて霧県の後を追う。

緊急とあって鍛えられた精鋭の足取りは速く、彼らはほどなくお目当ての建物に吸い込まれていった。

窓のいくつからは明かりが漏れ、人影が動く様子が散見された。

「第7特別旅団、通称セインツ・マーチン」

霧県がそう独り言を囁く。

「それも特撮番組でやってたって云うんだろ」

「いえ、こつちです」

と携帯を翳して見せる。

「盗み聞きしただけですよ」

「オレだつたらもつと世の中の役に立たないことに使っけどな」

「え、何です!？」

盗聴を続ける霧県に何でもねえよと羽柴が断る。

「それでほかに何か聴けたか？」

「少佐が別の区画、・・・小さな倉庫に客人といるからと伝えていますね」

「さっきの連中にか」

「はい」

「客人と言うのはゲンザブロウかも知れねえぜ」

「わかりませんけどね」

「悪魔憑きだつたらマズイな」

「イヌが散歩から帰ってこないなんてよほどです」

「そういうこつた」

2つの影は闇夜の空に向かって溶け込むように跳んだ。

一軒屋ほどの大きさの老朽化した建物。

簡素な鉄筋による骨組みと、鉄灰色の外壁。高い位置にのみ設けられた窓。

ドアは1つ。

まともに入るならば警備兵の立つ正面入り口しか手段は無い。

偽の記憶を植えつけられた3名は番兵に決まりの敬礼を交わし中に入る。

「ウェイト・レス・ムーブメント!」

霧県の横に中腰に構えていた異形の姿が瞬時に消え、藪の枝葉を散

らすと、

次の瞬間には音も無く兵がくず折れた。

最初に二人が倒れ、次ぎ、次にと6人が倒れる。

それぞれの視界から外れ、きづかれぬように順を組み、声を上げさせずに6人を地に突っ伏す。

これこそがフアランクス・アイガイオンの神速の妙技であつた。

霧巢にクイとあごで指示する。

それを合図にウォーコイト・ミルメックが及ばぬも素早い跳躍ですぐ後ろに降り立つ。

後ろも見ずに羽柴はポケットに手をつ突っ込むと、転がる兵士を跨ぐのもだるいばかりに

ぐぬりぐぬりと踏みつけながらドアへと歩いた。

「連中の気配はあるか」と羽柴。

霧巢が携帯に触覚をアクセスさせる。

「なんにも聴こえません。携帯、持っていないのかな」

「ねえよ。軍人ならな」

二人が顔を見合わせる。

「待ち伏せかもしれないぜ」

「だからペットの葬儀なんてするのはバカだつてんだ」

この言葉の最後の方は空中に霧散した。

その数万倍の音の衝撃波が二人の身体ごと呑み込み、球状に貪り食いながら膨張する。

同じ速度で光と熱が地面ごとえぐり、土砂を放り上げた。

爆煙が円運動を視覚化し、そのエネルギーの大きさを見せ付ける。

粉と化した建物の破片が爆散して周囲の木々を薙ぎ倒した。

半径50メートルの焼け跡から燻る二オイが立ち上り、残った骨組みを炎が焼く。

今も上空から落ちてくる残骸を避けもせず、テラテラと橙色に照り返す奇怪な足が現場に踏み入れた。

ジュキジュキジュキ――

不気味な音を雄たけびに、異形が炎の中心に現れた。

両の腕の鎌を満足そうに揺らしながら歩む。

「アツケナイ。ごみ（DUST）は焼却する値もないか」

「不燃ごみに出さないからさ」

ギイイイイインンッ！！！！

鎌と剣が火花を輝かせて交叉した。

上空からの垂直の攻撃。

これを異形が弾き返す。

跳ね返って影は弧を描いて剣を引き、後ろ宙返りで後方に滑り着地する。

「半魔ゴトキ。力弱イ、力弱イ、なああ」

鎌の異形がガチンガチンと腕を打ち合わせる。

スレイブ、ルコーリヤシルツカ。

霧県が空港で戦った異形だが、まだほかにも居たようだ。

人間の生理に訴える嫌悪されるべき姿、無数の触覚、巨大な複眼。

畏怖を強要する音。

悪魔憑きと呼ぶに申し分ない異貌。

「フアランクス。噂程ではナイようだな」

鎌が炎の揺らぎを均一にする。

これを紙一重の距離で避け、姿勢を下げて後ろ回しに蹴りを出す。

スレイブの右脚を払う直前、鎌がフアランクスの蹴りをガードし、

外へ力を流す。

勢いを殺さずにクルリと回転して今度は逆脚で中段に蹴りを撃つ。

スレイブは素早く跳躍するとキリモミしながらこれを避わした。

ジュキジュキ――

怪物の満足そうな声が木霊する。

「バックダツシュする奴は仕置きしねえとな」

アイガイオンは腰を落とした。

シュヒュン――

腕のソードが月明かりを送り返し、夜を舐める。

刹那、右脚を踏み込んだ。

ほとんど同時にスレイブが振りかぶる。

ビュッブン――

！！

鎌の一部が盛り上がると同時に、前方に飛礫が飛んだ。

高速のそれはフランクス――羽柴の腹をえぐり、貫通して肉片を炎に投じた。

がっ、と嗚咽が漏れて、しかしアイガイオンの足は止まらない。

その額に鎌を打ち込むスレイブ。

両の剣でこれを受け流し、巻き込むようにしてスレイブの体勢を崩す。

「セカンドストライク」

！！！！

一撃が甲虫魔人の二の腕を殴り千切って、1つの鎌がもぎ取れる。

ぐえ――と悲鳴を挙げようとする顎に突き上げの追撃が放り込まれた。

喉を鳴らす間もなく、首を月灯りに奉げる。

身体を失った頭部がぼとりと地面に落ち、羽柴はがくりと膝を落として地面に右腕を立てた。

左腕はえぐられた腹に当てられて、流れ出る血液を止めようと努める。

息が上がり、苦悶に表情が歪む。

ボトボトと透明の反吐が出て地面を塗らした。

「け、ざまねえ」

その強がりか精一杯だ。

腕からゆっくりと力が抜け、羽柴は顔面から地面に倒れ込む。

泥と反吐が口に潜り込んでもぴくりともせず。

これとは反対の側に吹き飛ばされたのが霧凇だった。

ウォーコイトの強硬な外殻が衝撃を和らげたものの、羽柴より爆心地に近かった彼がもろに影響を受け、遠く吹き飛ばされたのだった。赤い悪魔の姿はいとも簡単に解けてしまい、人の姿、一佐魏霧県いっさうきに戻っていた。

変身した姿のときに受けたダメージが人間のそれにまで及び、身体はおびただしい火傷を負っている。

「ヒーリング……」

霧県がそう小さな声で呟くと、徐々に焼け跡の赤みが引き始めた。急激な回復に痛みが伴ったのか、顔を歪めると歯を喰いしばり上体を起こす。

左の二の腕を抑えながら、口角に残った血を袖で拭い取る。

そうしてやっと周囲に目を配ると、自分の有り様を確認した。

爆発した倉庫からはあまり離れていない。

と、いつても数十メートルはあるだろうか。爆煙が立ち上る倉庫跡にはほとんど建物の形状を留めていない残骸だけがあった。

もし中に誰かがいたのであれば塵1つ残らないだろう。

搜索する無意味さを悟った。

しかし自分が助かったのであれば、フランクスの力を持つ羽柴も恐らく助かったに違いないと思い、霧県はゆつくりと立ち上がる。とはいえこちらに現れない以上油断はならない。

まだ軍の連中が集まっていないところを見ると、爆発から時間はそれほど経っていないようだ。

ずいぶん長い間倒れていたような錯覚に霧県は襲われる。

「ほう、噂に聞くよりもずっとタフなようですね」

聞き覚えのある声。

頭上からするが……。

振り仰ぐとまず視界に飛び込んできたのは、赤黒い塊だった。

それは宙に浮き、微かに左右に揺れ動いている。

時計の振り子のように。

塊からは一本の線が登り、大きな木の枝に括り付けられていた。真下には血の池が作られ、今も滴を吸い集めている。

それがゲンザブロウだった。

息があるやどうか分からない。

足を一步出すと、それを声が制した。

「そこより前に出れば無事では済みませんよ」

主の姿を隠したまま、闇に声が木霊する。

「不用品の交換ですよ、歓迎しまよ」

霧県が眼力に緊張を宿したまま答える。

笑いのような不気味な音楽のような響き渡る音が輪唱した。

「イヌと戯れるより数段面白い方だ。よろしいお取引と洒落込みましょう」

霧県は胸元から銀盤を取り出し、そつと地面に置いた。

「これでいいだろう——」

左右に意識を配る。しかし、人の姿ではウォーコイトの聴力には及ばない。

「そんなものは必要ありません。すでに役目を終えています」

「かんたんには騙せないね。手厳しいよ」

そう云うと霧県は上着に隠れたベルトにそつと手を乗せた。

「ノンノンノン、・・・お悪戯はいけません。貴方たちと争う気などありませんよ」

霧県は無惨な姿で吊るされた哀れなイヌを一瞥し、

「こちらにも争う気は無いが、戦う理由はすでにある」

「仰るとおりですね。そのような残忍な所業は私の成せるもんではありませんが、お止めできなかったのも道理。いいでしょう、お返しします」

と、言い放つ天の声に訝かしみを隠さず、

「業界ではそういう方が、・・・一番やっかいなんです」

「まあそう云わず、非礼を詫びると素直に受け取って頂きたい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「元よりあなた方の目的たるに相違あらんや」

これにコクリと霧県は頷き、慎重にゲンザブロウへ近寄る。

影の刃でロープを切ると、無事にゲンザブロウの血まみれの身体を抱きかかえた。

そつと地面に下ろし、傷の様子を見る。

ひどい傷のようだが、表面的な、そう見るからに惨い有様に見せるためのやり方で痛めつけられたもので、大事に至るようなダメージではなかった。

奈辺ならざるを睨み、霧県が齒軋りを小さく鳴らす。

「その憤りはこちらへではなく、当該するものに向けるが正義でしょう」

「あなたでないとすれば、誰です」

「その者はすでにここにはおりません」

！

「人というのは行き違いに疎いものです」

この声に木々の擦れ合う音が混ざる。

「待てっ！」

「さほどの狂気をお示しになる方です。待つてはくれませんよ」

「霧県、」

ここで羽柴の呼ぶ声がし、それ以降、闇から答えが帰ってくることは無かった。

ワンボックスが街道に躍り出たのはそれから約十分後のことであつた。

羽柴が運転し、道を急ぐ。

乱暴な操作にクラクションを数多浴びるも、怯みもせず、お釣り以上に罵声をキツチり返す。

ぶつけてしまったては警察に追われて面倒になるが、場合によっては組織と交渉させると息巻いた。

そんなめちゃくちゃなドライブにいたって馴れた様子で霧県が携帯を開く。

「こんなときに彼女にメールか」

「米軍のヘリが上空を通過して行ったようです」

「もうニュースにでもなってるって？」

「いいえ、周りの携帯から一般の方の会話を盗聴しています」

「おっとろしいな」

「既に本部に到着している時分だろう」

おもむろにゲンザブロウが会話に割って入った。

霧県が思わず抱きしめる。

「イヌの香典なんてバカげてるって話をしてたところだ」

羽柴が振り返りもせずに云うと、ゲンザブロウが低い唸り声で返す。心なしか羽柴が笑ったようだったが、バックミラーの隅に映る僅かな面積ではそれを確かめることはできない。

「カスタマーセンターの連中はまだ出ねえのか」

「ダメです、通じません」

DUST本部への通信は羽柴たちが車に戻ったときから不能状態だった。

携帯電話も、ベルトに組み込まれた専用回線も遮断されている。

あらゆる通信手段に長ける組織を上回る技術。

そんなものをいとも簡単に可能にする相手など数えるほども無い。

「そんなに返して欲しいならメールか電話でご相談して欲しいよなあ、おい」と、羽柴。

「ちゃんと返したんですけどね」

「ああ、そうだ思い出したぜ。オレはそういうところはキッチリ義理堅い男なんだ。返さなきゃいけないもんはちゃんと返すし、そうしたはずだ」

「この前人のゲーム中古屋に売っ払いましたけどね」

「るせえぞ霧県。金返しただろ」

「前、前！」

車が曲がりきれずに車道に上がってガタガタと激しく上下する。

舌を噛み切りそうになりながら、

「なんで軍をあんなにカリカリさせちまったんだろうなあ、ええ？

ああ？」

と羽柴が怒鳴る。

腕はハンドルを押さえようと必死で力を込めたまま。

「かの如きにつき、鳴謝しんぜる」

「はあ？」

「ありがとう、だって、ゲンザブロウ」

「だらあっ！ なに礼かましてんだよ、謝れっていつてんだよクソ
イヌー！！」

「秀長殿の恩沢により、ロレッタ嬢は千天の慈雨に預かった。かた
じけない」

「クソイヌ、てめっ、ガキ独り助かって、代わりにDUSTがどう
なってもいいってのか？」

「かように瑣末な集まり、人柱に足るだけで良しとせん」

凜然として答えるゲンザブロウに羽柴は地団駄踏んだ。

「羽柴さんと違ってさ、ゲンザブロウには思うところがあるんだよ
きつと」

霧県が宥めようと口を挟む。

すると返ってそれが油を注ぐこととなった。

「ほうほおお、オレがイヌよりバカだってかあい、霧県ちゃんよ
お」

全方位を敵に回し、立ち回るつもりか。

この男にそんなに強い愛社精神があったとはこれっぽっちも思えな
いが。

意地を撥ねるか。

「そうかいじゃあよ、神崎は、——飼い主様はどうなるよ」

少し声のトーンを下げて一呼吸置いてから羽柴が云った。

ゲンザブロウはこれにはすぐに返事はせず、窓の外を見やり、

「あの男もバカではあるまい、分かってくれよう」
そう云って羽柴を完璧に壅塞したのだった。

白亜の壁に囲まれた質素な風景の一室。

一輪の花だけが色彩を有するような、音も無く静かで落ち着いた空間。

病室、DUSTが管理する都内、湾岸沿いに臨む大病院の中にそれはあった。

夕日が沈み、夜の帳が訪れると、波は黒に染まり、街明かりと灯台の火だけが点る景色に変わる。

寝巻きに着替えたロレッタは眠りに着くことも無く、ただじつと長い間天井を眺めていた。

もうかれこれ数時間になるやもしれない。

その間彼女は考え事をしているつもりでいて、それでいて何も考えることをしなかった。

結論が出なかっただけかもしれないが、今この刻に空っぽな気分、虚しい気分であることだけは間違いなかった。

その碧い双眸のレンズを廊下の方向へ向けると、彼女はゆっくりと上体を起こした。

右の耳を澄まして、息までを潜める。

静けさに落ち着きが失われた。

張り詰めている。

キ——ン、と耳鳴りがする様な錯覚が襲う。

跽音が心音を掻き立てる。

誰もいない、そんなはずのないこの大きな病棟に、足音だけが響いた。

聞き覚えのあるあの音。

扉が開いた。

ロレッタは凜と背筋を伸ばし、これを迎える。

「アメリカ、ずいぶんと時間がかかりましたね」

ドアノブを後ろ手に送り、黒髪の女性は即答を忌避して歩み寄る。軍帽を外して胸元下に置くと、左手の鞭を抱えて小さな会釈を加えた。

「どれほど待ち侘びたことでしょうか。お嬢様、さあ帰りましょう」
アメリカのその言葉にビクンとその小さな両肩を揺らし、視線を外して金髪の少女は唇を嚙んだ。

呼吸を深く吸い込んで、半眼におとした瞼を上げる。

その表情を緊張の面持ちでアメリカが見つめる。

脂汗のようなものが額に浮かんだ。

「帰るところなどありません。何度も言っただけです」
ぴしやりと強い口調で返す。

その断りが二人の距離を描いた。

これにはアメリカも行き詰った様子で、言葉を嚙むこと倦ねている。

「私の不徳の致すところです。ですがかような、薄汚れた院よりは
お嬢様に相応しいと存じます」

「薄汚れた……」

ロレッタがさも不可思議といった顔でアメリカに向き直った。

「それは眼に映るものしかあなたには価値が無いからでしょう」

呼吸1つ挟んで、

「薄汚れた心こそ安穩を乱すのです」

バン、とアメリカの両腕がベッドの淵を突いた。

ロレッタの鼻先に自らの鼻先を近づけ、

「私のことをどのように思おうと構いません。ですが——」
アメリカが続けた。

「ロレッタ、あなたが辛い目に逢うことだけは許しません！」

強い語気が矛盾するような気遣いに真理を与えた。

これに溜息を被せて、

「私があなたと戻ったとして、何が変わるのです」とロレッタが問い質す。

畳み掛けるように、

「私設の軍隊まで拵えて、私があなたの元に匿われることに何の意味があるのでしょうか」

と言った。

アメリカは先ほどまでの強気の姿勢を潜めさせて、ゆっくりと屹立すると、

「すべてお嬢様のためです」

とだけ呟いた。

心なしか少し疲れた様子に思える。

ロレッタもこのようなアメリカの消沈した姿を見たことはなかった。弱気に受諾せんと易く墮することも脳裏を過ぎる。

これを左胸に当てた小さな拳で堪えて、

「私のためと思うのであれば、放っておいていただけませんか」と答えた。

アメリカは首を横に振り、

「それだけではできません」と言った。

ロレッタは悲壮に相好を崩し、これ以上の抗いが無力だと悟った。

「――従いましょう」

この返答に迅速に表情を明るくするアメリカ。

「ですがアメリカ、私は諦めません」

「そのお強い心こそお嬢様です・・・」

ほのかに優しさを湛えてアメリカが微笑んだ。

アメリカのこんな顔を見たのはいつ振りだろうか。

ロレッタはふとこんなことを想った。

いつからか彼女は常に張り詰めた空気を纏って何かと戦い続けるようになった。

もう十年以上になる。

彼女と出会ったのはロレッタがまだ小学校に上がったばかりの幼い頃だった。

すでに上院議員として名を馳せていた父マイク・ハラウェイと、アメリカの父ジョナサン・ガーフィールド少将は旧縁の仲でもあり、知り合うまでにさほど時間は掛からなかった。

ロレッタより一回り上の彼女は、出会った頃から凛々しく、男勝りの女丈夫で

今の彼女を想起するに十分な素質があった。

ただし表情はずっと明るく、周囲の人間を楽しい気分させる性格であったことは今とは異なる。

引っ込み思案のロレッタとは対照的なアメリカに焦がれ、家族ぐるみの付き合いもあってか姉のように慕っていた。

ところがある日を境に彼女の顔から笑顔が消えた。

それは夏の暑い、うだるような気温と湿気が不快な午後の一と時であつた。

ロレッタは自宅の広大な庭にいた。

その一角にある巨木の木陰で身を横たえ、鳥の鳴き声を聞きながら涼を取っていたときのことだった。

読書にも飽きて天を仰ぎ、木漏れ日に手を翳して指の狭間を抜ける光を玩んでいた。

そのときに襲われたのだ。

激しい動悸。

身を打つ熱い槌のようなそれに、ロレッタは首に手を当ててもがき苦しんだ。

喉が焼けるような感覚に息も止まり、声も出さずに芝の上で転がった。

こんなことは初めてだった。

家族から聞かされた病気も無い。

それは幼い彼女にとって天変地異よりも恐ろしい体験だった。
無知な幼子は死を覚悟することも適わず、抗い続けた。

——その手を握るものがあつた。
朦朧とした意識が再び整う。

息も荒げに失われた視界を泳ぐ。

見慣れた黒髪。

遠くから呼ぶ必死の声。

アメリカ——。

それから数時間後。

ロレッタが目を覚ますと傍にはアメリカがいた。

彼女は両の頬に涙を走らせ、今にも崩折れそうな頼りなさげな顔を
してこちらを見ていた。

碧い瞳が光を取り戻してその視線を重ねると、アメリカに力が戻る
様子が垣間見えた。

椅子から立ち上がったアメリカが、ベッドクロスから弱々しく出さ
れた右手を両手で包んで、

何かを語りかけた。

何と云っていたのかは思い出せない。

もしかしたら聴こえていないのかもしれない。

反対にロレッタから尋ねた。

アメリカの胸元におびただしい血糊が飛び散っていたからだ。

私の吐血だろうかとすぐ様思いつく。

アメリカは返答に難儀しているようだった。

そうこうしているうちにロレッタは彼女の両腕に抱きかかえられて、
耳の間近で大きな鳴き声を聞かされることになる。

これが収まり、焦点の合う距離に離れたときには彼女は笑いながら
泣いていた。

事情の呑み込めないロレッタはただ戸惑うだけであつたが、
彼女にとって自分がどういう間柄なのかが思いのほか近いことを初

めて感じた瞬間でもあった。

アメリアの笑顔を見たのはこれが最期となった。

また、彼女はこれからしばらく私と会うことをまるで避けているかのように距離を置くこととなった。

彼女の父、ジョナサン少将が亡くなるまでの合間だったと記憶する。その隙間を埋めるようにアメリアは軍の上層に入り込み、めきめきと頭角を現して、

元からのコネもあり異例の出世を果たす。

それはこの国が進める戦争プロジェクトへの積極的な参加という意味も含まれていた。

彼女の指揮で大勢の人間が死んだかもしれない。だがそれは愛国、郷土への奉仕と捉えられよう。

そして極めて立派な身分を携え、ロレッタの眼前にもう一度現れたのはつい先日のことであった。

この間ロレッタ自身は父の元で英才教育を受け、こちらにも相応に高い立ち居振る舞いを成す淑女として成長していた。

だが再会する二人を世界が引き裂いた。

アメリアの申し出はロレッタの目指す世界との決別を求めるものであった。

そんなことを理解できるはずもない。

片や外に出て戦い、他方は内で人心を率いることに努める。

生まれに負った運命的な所業とはいえ、志しの高い奉仕的な有り様は、ともすれば孤独を伴う生き方に一滴の清涼を与えん理解という名の聖水だったはず。

少なくともロレッタの側はアメリアに憧れ、これを嚆下するを望んだ。

何故ならガーフィールド家とハラウェイ家には古より架せられた重き十字架を持つ、刎頸の友と知ったからに他ならない。

いや、そうではなくとも変わりなかったと信じたい。

幸いにも親族とも、アメリカの一族ともこの呪いとも云える運命に苛まれたものは無かった。

ただ独りロレッタを除いて。

きつとアメリカはこれを不憫に思ったに違いない。

ロレッタには彼女の献身からそう思えた。

代わりにロレッタから彼女に果たして何が報恩だったのかを言い切る自信は無い。

たしかにアメリカに友人は多くなかったとは見える。

でもまったくいなかったわけでもない。

何か彼女にとってロレッタが大きな支えになったのかもしれないが、それが何なのかを聞く勇氣は無かった。

いや、もしかしたらすでに仄めかしたことはあるのかもしれないし、もしくは彼女に問うこと自体無為なことだと察するほどに理解しあっている仲なのか。

いずれもロレッタには確信が持てなかった。

アメリカとの想い出は数えるにわずか数年。

固い絆を築くような時間も出来事も思い当たることは無かった。ただ居るべき場所に居ただけに過ぎない。

「DUSTの方々は何と——」

ロレッタはアメリカの用意した着替えに袖を通してながら訊いた。病室の一角でこちらに見向きせず待つ彼女の背中に届いた。

「クス（DUST）どもに断りなど無用です」とアメリカが答える。

まるで憎しむかのように一音一音毎に圧を掛けた声。

「私から勝手を申し出たことです。DUSTの方々を恨むのはお辞めして欲しいのです」

ロレッタが懇願したがすぐの返答は無い。

「お嬢様には関係の無いことです。いえ、こんな言い方はいけませんね——、貴女は関係から距離を置かなければなりません」

との言い換えがどれほどの意味を持つのかはロレッタには分からなかった。

「私ひとりを連れ去るにどれほどの犠牲を出せば気が御済みなのです」

「それは結果です。世界の事情を統べる者にしか分らない責であれば、痴れ者は天でその罪を贖うのも道理」

「貴女らしいと思います」

「先ほども申しましたとおり、私のことをどう思われようとそれもまた神の思し召しだということです」

「ガーフィールド家よ敬虔なれ、——ですね」

「他人より先に世の末を見たなれば故の運命と受け入れたまでです、お嬢様」

「父のような戦い方ではいけませんか」

「大統領のことでしょうか」

ええ、とロレッタが頷くと——、アメリカは一笑に伏した。

「かような男の何が信じられましょう。それが例えお嬢様の掛け替えの無い肉親だとしてもです」

これは云い過ぎですね・・・、と付け加えようとして振り向いたアメリカが姿勢を硬直させた。

「ロレッタ・・・」

アメリカの呼びかけにロレッタが冷めた目つきで応える。

その交わした視線を降ろして見た先に、冷たい金属の銃口があった。

「貴女からの頂き物を——こんなことのために使うことになるとは思いませんでした」

「お嬢様に撃てるとは——」

アメリカが言い終えるよりも早く、銃声が狭い室内に木霊してガラスの割れる音が院内に轟いた。

赤い滴が床に溜まり、さらにさらにと拡がる。

痛みを訴えることは無かったが明らかに動揺を浮かべてアメリカが後ずさる。

押さえた大腿部からは血液が系引き落ちる。

「強くなれましたね」

「本当に撃つかどうか試せば、それを真実と知ることではできません」

「交渉もお上手になったようですね」

「血に染まりし運命はアメリカ、貴女だけのものじゃありません」

そうロレッタが云うと、

「遅かったことは承知しています・・・—— 償うことは適いませんが」

「では今償いなさい—— アメリカ。袂は分かたれたのです、私は己が道を行います」

冷静を装ったロレッタの均一な物言いにアメリカは、

「それはどちらへ、どこへ行くのです。ロレッタ。あなたの帰る場所などほかにないのですよ」
と尋ねた。

この自らの問いかけにハツとし、慌ててアメリカが歩み詰める。

これをひらりと避わして、素早い身のこなしでドアから廊下へ滑り出る。

「待つて、ロレッタ」

と呼び止めるのも聞かずに彼女は足早に駆け出した。

「いけない！ ロレッタ！！」

力の入らない左足をガクリと落として体勢を崩すと、アメリカがドア越えに倒れた。

これを振り向き様に一瞥し、廊下の奥へと小走りに消えて行くロレッタ。

急激に血液を失うことで視界は霞のようにぼやけ、アメリカは絶叫した。

「ロレッタ——！！」

どうしていつもこうなの・・・ アメリカは薄れ行く意識の中で地

団駄踏んだ。

遠くの方で、感覚としての空間がそう教えているのだが、大きな爆発音が響き、しかし今のアメリカにはそれを判断する意識も蒙昧となっていた。

ワンボックスが片輪を上げてまで急角度で曲がったのはそれからわずか数十秒前の出来事であった。

いつもいい加減な運転はしていると評判の男だったが、これほど荒っぽい運転はこれが初めてだった。熱心とはいえない仕事振りから、あえて遅く走ることと名を馳せていたからだ。

「羽柴さん、事故ったらそれこそ遅れますよ」

霧島の当然の指摘には返事もしない。

羽柴は前方を凝視したままハンドルを握って集中している。

窓からはゲンザブロウが顔を出し、見え始めた矢先の病棟を凝視していた。

その口から状況の報告がなされると同時に、霧島の目にもその様子が飛び込んできた。

機械音を鳴り響かせ、金属の擦れる高音をリズムカルに刻みながら立つ十数の軍勢。

第7旅団が保有する機械化精鋭部隊、アーミング・ダブリット12機だ。

「やっかいなのが陣取ってやがる」

羽柴が吐き棄てる。

上空にはヘリのばら撒く回転音が支配し、その内の1機が旋回すると、その機首をこちらへと向けているのが見えた。

目の前に立ちはだかる検問の兵士を跳ね飛ばすと、それがヘリ＝ブラックホークからの銃撃の合図となった。

すぐさま建物を利用した死角に潜り込み、これを避わす。

車の過去位置を銃痕が記録した。

間髪居れずにアーミング・ダブリットの一斉射がこれを迎える。柱の裏に車体を流し、弾数を減らすも全てを回避できず、ワンボックスの側面ドアがひしゃげて飛んだ。

その反対側に影が3つ飛び退り、同時に霧県が叫ぶ。

「変身、ウォーコイト・ミルメック！」

空中で身を翻しながらベルトにカプセルを送り込む。

演舞を披露して右手から地面に降り立つとくるりと回転して大地に立った。

全身を赤い稲妻が走り、黒炎の悪魔が生誕する。

直後、ロケットランチャーの爆風共々ワンボックスが爆発四散した。その破片を悉く薙ぎ払い、素早い動きでアーミング・ダブリットへ接敵する。

12機の容赦ない攻撃がさすがのウォーコイトの甲皮を焼く。

だがその弾丸のほとんどを跳ね返して無力化すると、ついにかの中心へと躍り出た。

「霧県の野郎、ガンコなだけあってけっこうな硬さだわ」

羽柴が褒めるとも貶すとも。

すると彼の携帯電話が鳴った。

こんなときにもキツチリ耳に当てるのがこの男。

「はし、シモ」

状況を考えれば有り得ないことだが、呑気な言い様で電話口に出る羽柴。

『ふつつの物言いができないんですかつ！』

声の主は霧県のものだった。

ち、つと羽柴が舌打ちする。

地獄耳め。

思わず羽柴が呟く。

「聴こえていますよ」

ウォーコイトの尋常あらざる聴覚と、携帯電話を介した盗聴・通信

能力は羽柴にも限界計り知れぬ領域だ。こんな土壇場の生き死にの中でこれほどに能力を発揮するとは。

「余裕あんならさっさとやれや」

羽柴がシブシブと言う。

「云われなくとも・・・」

霧県は言葉を繋げながら賦活の掛け声を上げる。

これが金属のぶつかり合う激しい音と重なって、羽柴の耳を直撃した。

思わず携帯から耳を離す。

それでもなおスピーカーから重い金属の響きが聴こえた。

さすがの羽柴も文句を垂れる気を失い、携帯を仕舞うとゆっくり歩みだした。

機械化歩兵の1体を軽々と持ち上げて別の1体にぶち当てる。

耳を劈くような衝撃音が鳴り響き、両のアーミング・ダブリットがそれぞれ反対の方向へと吹っ飛んだ。

その中央に異形が居た。

赤い炎をゆらゆらと揺らし、漆黒の金属光沢をぎらぎらと照らす鎧を纏う。

霧県のもう1つの姿、ウォーコイト。

その気迫に圧されたか、さしもの第7旅団の精鋭もひるみ留まる。その時間の隙間を嫌って、内の1体が右腕を薙ぎ払った。

先には接近戦用の小型電磁ナイフが備わる。

これを難なく打ち払い、勢いを殺すことなく流れるままにその腕を引き千切る。

装甲腕が地面に叩き付けられると同時に、人の腕が露出した。

これを軽く逆手に捻り、鈍い音をもって砕く。

その機械歩兵は激痛の雄叫びを空に放つてもんどり打って倒れこんだ。

ミルメックがこの動作に入ると同時に部隊全体がバーニアを噴射し、

即座に十メートル後方へ飛び退る。

それぞれの肩に装備された60ミリレールキャノンが中心へ照準を集めた。

飛び込んだ1体を犠牲にしての確実な仕留め方だ。

「霧凧！」

ゲンザブロウが危殆を察知し、呼びかける。

いなやウォーコイトの身体がにわかに沈んだ。

「デモニツク・ハウル！！！！」

キュンッ

最初の音はそう聴こえた。

その先は音という概念を破壊する、超々高周波がこの場を支配した。指向性をもったこの音の衝撃波は、後方に位置するゲンザブロウらには届かない。

しかし前方扇状に並ぶアーミング・ダブリットの一団に逃れるすべは無かった。

超々高周波は金属の装甲を付き抜け、直接搭乗者の鼓膜に襲い掛かる。

くぐもった短い悲鳴が右と左から断続的に沸き起こり、次いでバタバタと路上に倒れこんでいった。

一部の機器が耐え切れずに破裂音を鳴らし、攻撃システムはその機能を失った。

危うくこれを免れた頭上のブラックホークが支援せんと切り返す。

システムと搭乗員の回復までに時間を稼ぐつもりだ。

「化物め」

通り一遍のセリフを吐き捨て、操縦桿のトリガーを引く。

ブラックホークの両サイドに搭載されたガトリングガンが一斉射される。

——はずだった。

ギッ………

変わりに不気味な虫の鳴き声のようなものが聞こえたような気がする。

た。

キャノピー越しに見える凶悪な怪物から目を逸らすことはためられたが、

好奇心が上回った結果、その音の発生源を凝視する羽目となった。それはこの世のものとは思えない影形をしたもの。

大きさは数十センチ。

肉の塊のようなものから手足のようなものが生える。

金属ともプラスチックとも思えるような光沢のあるボディ。

ゆっくりと顔のようなものをこちらに向けるともう一度先ほど聞いた鳴き声のような言葉を呟いた。

ギッ

ふと気がつくとも操縦桿から手を離している自分がいた。

今それを操つるのは間違いなくこの化物だった。

パイロットが生理的な嫌悪感を打ち払いこれを排除しようと手を伸ばす。

いや、だがそれは叶わない。

手首が無いのだ。

関節の部分で一直線に切り取られている。

その先は——化物の口の中に少しずつ呑み込まれて行くではないか。ああっ——！

と喉まで上がった声は、しかし振動と爆発の中に掻き消えた。

2機のブラックホークが急接近し、あっという間に激突して墜落したのだった。

「霧島ちゃんは怒らすと怖いねえ」

柱の影から見ていた羽柴がククッと笑いながら、目だけは真剣なままに呟いた。

部下に支えられた肩を外して窓辺に駆け寄ると、アメリカはその双

眸を見開いて驚愕した。

窓下、病院ターミナルへの狭いアスファルト上には、第7旅団が誇る精鋭機械化部隊の見るも無惨な結果が横たわっていたのだ。声も無く、ただ窓辺にしがみついて悔しさに歯噛みする。

己が生き様の全てを賭して作り上げた至宝が、たった一匹の害虫によつて今まさに崩壊しようとしているのだ。

脚に力が入らずに、ズルズルとガラスに置いた掌を滑らせてその身を墮とす。

「マツキンジめ、しくじったな」

アメリカは業腹に身を打たれ、地団駄を踏んだ。

「あの男、異形どもを始末して見せようなどと出来もせぬ譫言を――」

駆けつけた部下の1人から松葉杖を受け取ると、アメリカは銃痕に巻いた包帯から夥しい血液を溢れさせながら立ち上がった。

一瞬血の気が引いてくず折れるも両の腕で杖を抱えて留まる。

報告を催促するとロレッタが屋上の方へ駆け上がっていくのを見かけたということが分かった。

案の定の行為と、アメリカが狂ったリズムで階段を上がる。

その鼻先に影が落とされた。

意図的な角度。

踊り場の窓から挿し込む光を遮るように。

アメリカの足が止まる。

同行する数名の兵士が銃を構えて前後左右に散開、少佐を護る位置についた。

「イヌ一匹手なずけられぬとはな、つくづく男は役に立たぬ」
語りかけたかどうか。

イヌが左の前足を一段降ろす。

兵らに緊張が走り、一斉に銃口が向いた。

少佐の指示を待つ。

だが合図は降ろされない。

「奴はすでにお前の胃袋にでも呑みこまれたか、異形」

アメリカが卑屈な笑いを浮かべて皮肉る。

イヌと呼ばれた四つ足が二歩目を降ろすことを辞めて止まった。

「ロレッタを返してもらっ」

低い唸りとないうざげになつた声が督する。

「手元に置いてなんとする、ケダモノ。——DUSTの人形にでもするつもりか」

アメリカが問う。

イヌの右足が着いた。

「人の仔よ。ヌシが道は血で血を洗う畜生道なり」

「それがどうした、代わりにロレッタを贄にしろと？ 愚昧なケダモノめ」

「互い相違に生ける神意もあらんや」

「畜生の神など知らぬ！」

言葉の隙みに合わせて撃鉄を引くやゲンザブロウの足元を火花が撥ね回った。

これを微動だにせずさらに詰め寄る。

あと7段と迫った。

「得意然か、悪魔憑き・・・」

アメリカはハードボラーを鼻先に上げてゲンザブロウへ真っ直ぐに向けた。

「我々は貴様らと戦うために組織された第7旅団、セインツ・マーチンぞ！」

彼女の腕が前方へ振り払われた。

重装備の歩兵による一斉射がゲンザブロウを捉える——
はずであった。

掛け声が病院の冷たい大理石の壁に反射したその瞬間、ゴトゴトと重く鈍い音が床を打ったことに——はじめ、アメリカの理解は起こりえる事態の想定、その範疇を出ることが無かった。
コンマ数秒。

まるで塗りつぶされた黒の空間に身を置き、時間が止まったかのような錯覚のなかでアメリカは状況の把握に努めた。

応援として駆けつけた部隊との連携の取れた攻撃に、さしもの魔性のモノも仕留める計算があった。

だが現実には首を落とされたのは旅団の兵士たちに他ならない。

文字通り首から上を鋭利な刃で切り落とされていた。

首から上が存在しない虚ろな肉が各々思い思いの方向に倒れ、行き場を求めるかのごとく階段を転がり落ちる。

動揺を押し殺したアメリカが首を巡らし行為の主を求めて泳いだ。
「ヴァウ、とゲンザブロウが吠える。」

それに反応した彼女が再び視線をイヌに戻すと、それを待っていたかのごとく太陽の如き光の放射がゲンザブロウを中心点に拡がった。続けざま、光の球は中空に飛び上がり、アメリカの頭上まで一瞬にして距離を詰めた。

思わず腕を顔前に置いて身を護る動作を取る。

それが悪魔憑きの爪に適うなど到底有り得ないと知りながらも。

刹那、大きな衝突音が前後に生じた。

アメリカの身体はそのエネルギーに弾かれたかの如くバランスを崩し、そのままフロアまで吹っ飛ばされた。

硬い床に叩かれる直前、どすっという鈍い音と共にわずかにバウンドし、首無し死体の上に転げて止まった。

全身を強い痛みに襲われたもののすぐさま上半身を起こし、顔を持ち上げる。

目の前に堂々と立つ巨躯の獣。

全身にツララを髭髯とさせるトゲを纏い、鎧を備える四つ足の魔獣。ジャベリン。

だが向けられたのはその憎悪の眼差しではなく、彼の背中であった。

「人の仔アメリカよ」

そう問われてアメリカはビクンと肩を竦めた。

慌てて死体から銃を奪うとトリガーに指を掛ける。

「うぬが三途の閻を望むはかの者ぞ」

――！

「謀を――」

「世迷うてる遊び時はないぞ」

そのゲンザブロウの言葉に答えてか計り知れぬが早く、アメリカの銃が火を吹いた。

目標を逸れた着弾を嘲笑うかのように、皮一枚の傍を影が掠め、笑い声を模した風の音が輪唱した。

その音を追って跳躍したゲンザブロウの牙が空を斬り、影がスルリと翻って抜ける。

「戯れるな、マツキンジー！」

追いざまに放った数発の銃弾を、これもいとも容易く避かわすと、影は人の形を取って踊り場に着地する。そう呼ばれた者の姿となつて勢いを殺すために数歩行つてからあと、胸元を正してタイを整えるところらを見ることもなく仰々しい会釈を加えた。

ゲンザブロウが唸り、威圧感を押し返そうと試みる。

「つくづく羨の悪いワンちゃんだ」

フフとマツキンジーが微笑む。

「補佐官殿、ゴミ（DUST）の後始末は任せたはずであらう」

大腿部を押さえてヨロリと立ち上がったアメリカが訊く。

「少佐、来る大統領候補たる私です。政治家にとって口約束はお手の物でしょう」

「私を殺したところで貴様に得るものがあるとは思えぬ」

アメリカの問い詰めに對し、マツキンジーは白々しいほどの驚きを表現した。

きょんとした顔で顎に手を当て、しげしげと彼女の方を見、数歩づつ近づいてくる。

ゲンザブロウの全身の体毛が逆立ち、警戒心を強めて一歩前に出た。「汚らしい獣だ。傷ついた下等動物など私の相手ではない」

ダン、と丸太で打ちつけたような轟音が反響し、ゲンザブロウ「ジ

ヤベリンが覆い尽くさんとばかりに襲い掛かった。

これを片手で軽々といなし、踊り場に向けて放り投げるマツキンジ
ー。

巨体がステップを碎き、手すりは大きく捻じ曲がって原型を失った。
噴煙が舞い上がり、撥ね回った破片が落ち着くと再び静寂が訪れた。
もうもうと立ち上がる塵の中から一歩、また一歩と男が近づいて来
る。

全身を打ちつけ、失血したアメリアがたった銃一挺の抵抗で倒せる
相手ではない。

「つまりは——、そういうことです」

息も荒げなアメリアに対峙してマツキンジが微笑んだ。

「少佐を殺めるつもりなどありません」

少佐の手から銃を外し、そっと自分の懐に納める。

耳元に顔を近づけ、ねっとりとした口調で囁いた。

「殺すつもりならあなたはすでに死んでいましたよ」

ギクッとしてアメリアが半歩退がる。

「どうしました、フロイライン」

「なにを望んでいる——」

「そんな冷たい仰りようはないかと存じますが……」

「回りくどいぞ、マツキンジ」

「貴女のお父様のご希望を叶えて進ぜようというのです」

「お父様の——・・・？」

おや、と首を1、2度ひねるマツキンジ。

「しらばつくれるのはおよしなさい、アメリア・ガーフィールド」

アメリアはこれに首を振って応える。

「お亡くなりになった父上の意志をこの私が継ぐというのです。

赤の他人のこの私がね、こうやって命を懸けてまで」

「父は、父は一体——、死してまで私に何をさせたいのだっ！」

「私はてつきり、……——ロレッタお嬢様への固執は、御降心の
上でのことかと思っていました」

「そのつもりだ、ロレッタを救うことこそ私の、……償いぞ……」

「お戯れを――。運命の輪は回りだした。貴女の自らを欺く言葉で何が変わりましたよう」

ヒュン、と空気を切り裂く音が打った。

ベルトから引き抜いた鞭がしなり、マツキンジーの頬に血潮を集める。

これはピクリとも避けず、不敵な笑みで容認するこの男。

「ロレッタお嬢様はすでに覚悟を決めております。いつまでも子供の如き駄々をこねるのは、……アメリカお嬢様、貴女なのですよ」それを聞いたアメリカがハツとする。

そうか……そうだったのか――。

「マツキンジー、貴様か。貴様がお嬢様をそそのかしたのだな」男がにやりとする。

「いいえ。私はただ、ロレッタ様のご意向を伺っただけに他なりません。かようにでしゃばった有り様は身に余ります」

「おのれっ！」

アメリカがそう振り上げた拳と腕を難なくと受け止めて優雅に捻り落とす。

苦悶の表情でこれに耐えるアメリカ。

「黙ってお聞きなさいフロイライン」

締め上げる力をきつくすると、長い悲鳴が洩れた。

「ロレッタお嬢様は悪魔の呪詛から逃れようと懸命なのです。健気じゃありませんか。実に心を打たれる家族への忠愛です」

そう言い放つマツキンジーに対し、アメリカは苦痛に優る意志でマツキンジーを睨みつける。

「貴女のお父様とロレッタ、そしてこの私の希望通りの結末が待っているのです。それを邪魔しようとは何と身勝手なことかと省みませんか」

「マ、……マツキンジー。貴様、貴様はお嬢様に嘘を吹き込んだ

な」

「心外なことを。例え何があろうとロレッタ様の意思に変わらないと確かめての上です」

「そうか、それで日本への亡命などと云う唐人の寝言を——」

「眠り姫が永遠の床に着く時間が迫っています。寝言を聞くのであれば後刻——」

マッキンジーの腕がアメリカの細い喉にあてがわれた。

月光が照らす宵闇の空。

煌々と照らし出された病院の屋上は異様な空気に包まれていた。

元より張り巡らされた鉄条網が、美しい金髪の少女に特異なエロスを醸し出させていた。

その手にはこれまた象徴的な黒光りする銃が握られ、すべてがアンバランスなハーモニーを奏でていた。

少女、——ロレッタはこめかみに銃口をあてがった。

そして静かに目を閉じ、ためらうことなく引き金を引いた。

タン、と乾いた銃声が夜空に響き渡り、次いで重い落下音が追いかけた。

金髪の少女は額の横から血を流し、呼気を止めた。

束の間。

やおらその蒼き双眸が見開かれ、小刻みに二の腕を震わせながら上半身を起こす。

血液は急激に水分を失って凝固し、剥離して元のつややかな肌を形成した。

やはり——。

ロレッタは死ぬことが出来なかった。

9ミリパラを1つ撃ち込んだぐらいで、当たり所が悪くとも死ねない身体。

死の危機に晒されるといつも自分の中にもう1人、別の自分が囁い

て生きろと宣う。

ヒーリングと呼ばれる能力で現世に引き戻され、僅かに身体を弱めるだけの辛苦に溺れる。

こんなことの繰り返し。

それも今日で終わり――。

日本という東洋の大国が私の命運に終止符を打ってくれる。

そしてお父様は世界の悪意と堂々と戦い、アメリカは呪詛の捕縛から開放される。

私がたったひとり死ぬだけで――。

ドアノブが回る音が鳴った。

銃口を向けて少女が振り向く。

ドアが開き、人影が外に現れた。

丸まった背中、後ろ髪を簡素なゴム1つでまとめたボサボサの頭。着崩してシワの寄った上着、ポケットに片手を入れたままにかボヤク。

またメールだ、こんなときに、と――。

取り出した携帯を馴れた調子で扱うと、用事を済ませて折りたたんだ。

「どくせー、こんなときによ」

だったら電話に出なければいい、とは云わず、

ロレッタは自分の世界には無い独特な感性に、己が運命を忘れて笑った。

「あんだよ、なんか付いてるか、顔に」

ゴシゴシと薄汚れた袖で頬を擦る羽柴秀長。

「ハシバ、待っていました」

あん、と疑問とも返事とも付かないイイ加減な日本語で返事をする
と、ちよつと照れながら羽柴はフェンスに寄りかかった。

「屋上からの眺めはオレも好きだぜ。でもよ、病人てな横んなんな

きやイケねえ」

羽柴の説教には応えずにロレッタは月を見上げた。

彼は頬をぼりぼりと掻いた。

「ま、風邪引いても遊んでたオレが云うこっちゃねえな」

ロレッタが羽柴にわずかに首を向ける。

幼い仕草で斜めに身体を傾けて見せた。

「なんだい、月なんて向こうと変わらねえだろ」

「だから眺めるんです」

ロレッタが屈託なく云うので、羽柴はああそうかいと噛み砕きもせず呑み込んだ。

「お嬢さんがいないんで——」

「——」

「あんたを心配して・・・、良い歳した大人がマジ顔で押し寄せてるぜ」

「羽柴さん——」

少女が名を唱えると彼は面を上げた。

「わたしを——」

月明かりが大きく流れて彼女の美しい端正な横顔に昏い影を落とした。

「わたしを、・・・殺していただけませんか」

それを聞いた羽柴は、驚いた風も無く、ポケットに手をつ突っ込んだまま彼女との距離を一步詰めた。

ロレッタも向きを変え、羽柴に正面、相對する。

そしてその白くて弱い、血の通いが薄っすらと浮かぶ喉元を彼の眼前に捧げる。

目頭に留まることに疲れた涙滴がポツリと落ち、小鼻を濡らして顎を離れてアスファルトに黒円を穿つ。

震える手で十字を切ると、願うように静かに息を止めた。

「神様は、——」

羽柴がほとんど聞き取ることの出来ない様な小声で囁いた。

思わず閉じた瞼をわずかに持ち上げて声のする方に瞳を動かす。

「神様はさ、どんなに辛くたって・・・死ねないんだぜ」

その真意を汲み取ること適わず、少女は儀式を中断した。

「そしてあんたはオレにとっちゃ女神なんだよ」

ロレッタはなにか言い返そうとして、首を激しく振り、視線を落として震えて身体を小さく屈めた。

「人心に迷いを与え、カタストロフたるこの身。露命を？ぐに値しませぬ」

と、誘惑を振り払うかのように強く、短く切って吐く。

「悪魔との契りを破るには、やはり命絶つ道しかありえません」

「そのためにDUSTへ来たわけだ」

「そうです、ええ、あなた達に殺して、殺して欲しかった――。自分ではどうしようもできないから――」

そう云って地面に前屈みにうつ伏すと、彼女はわつと声を出して泣いた。

「そのために私の部下を何人も葬ったのですね、お嬢様」

突如暗がりから別の声がして、大きな黒い影が二人を月明かりから隠した。

影は猛烈なスピードで数メートル上空を飛び去り、一段高い給水タンクの上に舞い降りる。

そして黒い翼を折り畳むと、人の形に変わって留まった。

優雅な振る舞いで腰を掛けると静かにこちらに語りかけた。

「お父様に叱られても、今度はお助けできませんよ」

「マッキンジーさん――」

ロレッタがその人影の主をそう呼んだ。

羽柴は首だけを背中側に向けてツバを吐き捨てる。

「霧島の野郎、いつつも仕事が中途半端だぜ」——と、念ず。それを聞き逃さず、

「いえいえ、その方でしたら完璧にこなして下さいましたよ」とマツキンジーが天使の微笑で湛える。

怪訝に見る羽柴の前にどさりと塊が放り投げられた。

「めんどろなロボットの掃除もして下さいましたし、私の手も煩わせることはありませんでした。大変優秀な方です」

「霧島か——」

足元に転がった黒い塊が見知った顔だと気づく。

全身に壮絶な戦いの傷跡が見られる。

息があるやなしや——。

「ご安心を。ちよつと眠っていただいているだけです」

「ずいぶんと過激な子守唄を謡うね」

と羽柴が揶揄する。

「聞き分けの無い子供には仕方ありません」

「魔結晶が目当てってわけだ」

という羽柴の指摘に目を丸くして男が笑った。

「どうしてそんなものを？ いずれ私の自由になろう希少な悪魔憑きを使い物にならなくてはまずいでしょう」

「連邦のDUSTは政府の子飼いでしかないからな」

「おや、案外付度優れた方で話しやすい」

「クソ回りくどいダチがいるんでね」

と言つて、チラと足元を見やる。

「私も回りくどいことは嫌いです」

「気が合うとはね、つくづく虫が好かねえ」

羽柴がベルトに手を伸ばした。

「いえいえ、申し訳けありませんが私は子守で疲れてしまいました——それにそうそう・・・ペットまで面倒を見たのですから何かショーでも観ながら楽しみたいと思うのです」

そう云つて右手を翳して指を鳴らした。

うう——・・・と声が洩れたのは羽柴のすぐ傍からだつた。

ロレッタがゆらりと立ち上がり、俯いてぐらりと前に倒れた。

思わず支えようと踏み出た羽柴を、強烈な打撃が出迎える。

どむ、と鈍い音がして羽柴の身体が宙に浮いて地に叩きつけられる。

ぐえ、と一声挙げて転がり、フェンスの根元にぶつかって止まつた。

その間も少女の変化は滞ることなく続き、やがて恐ろしい姿へと変貌を遂げる。

美しい黒い獣毛が艶やかに延びて四肢を覆い、月光の中心に立つて人型の魔物、ヴォージエの特異な姿を闇夜に浮き彫りにする。

「いつ見ても愛くるしいですよ、お嬢様」

ふざけた調子で拍手を乾いて打ち鳴らし、マッキンジーが喜ぶ。

「なるほど、てめえのスレイブってわけだ」

苦痛に顔を歪めながら羽柴が云う。マッキンジーが頷く。

「それは初耳だな、マッキンジー——・・・」

扉を失つた屋上入り口から二人の会話を遮るように声がした。

息も絶え絶えに。

黒髪はもつれて絡まり、軍服は鮮血に染まってどす黒く変色している。

壁にもたれて睥睨を向けるも長くは続かず頭を下げるアメリカ。

「彼女は、ロレッタは父のスレイブだ。父が死んだ今となってはただのヴォージエに過ぎん！」

だが事実各々が目の前で、ロレッタは自らの意志を奪われ傀儡子となれ果てた。

それが許せずアメリカは男に銃口を向け引き金を引く。

カチカチと金属の乾いた打撃音が響くも、火薬の爆ぜる音は起こらない。

あるはずの弾はマッキンジーの掌で弄ばれていた。

臆病モノめ——、アメリカが舌打ちする。

マツキンジーは相手にもせず、

「あなたのお父上は気骨な軍人でしたが、どうにもお堅過ぎる……
と、云った。」

「——・・・！？ 貴様、さては、！！」

「悲しむことはありません。軍人とは元より国の奴隷なのですから」

「わたしは、私は——この十年という時間、貴様のような外道に操られていたというわけか！」

そう云ってヨロヨロと近づくアメリカ。

「お嬢様を苦しめ、父の魂を奪い、そして私を弄んだ！」

「お父上の遺言を護らなかったのはフロイライン・アメリカ、貴女の驕慢というものです」

「父の贖いとして今日までこの恥命を晒してきた。だが——」

立ち止まり屹立するアメリカ。マツキンジーを鋭く指差す。

「だが、なんです！？ 我が子可愛さ故の人身御供、——とした父親の深い愛情を宥恕しておやりなさい」

「赦せだ！？ つくづく淪落した男が。寄生体に心亡くした父など死人も同じ、けてして父などではない！」

「好きになさいフロイライン。貴女の煩悶もこのショーが幕を降ろす頃には骸と化すでしょうから」

卑しい笑みを浮かべてマツキンジーが結ぶ。

それを聞いたアメリカは思わず変わり果てたロレッタの姿を目の端で追った。

ロレッタ、ごめんなさい——。

そう胸中に言葉を抱き、締め付けられる痛みに苦しみ耐える。

膝から堕ちるアメリカを毛皮が受け止めた。

固まる血液に片耳を閉じられ、ひしゃげた耳翼でアメリカの横顔を支える。

そして——ゲンザブロウは彼女の身体をそつと壁により掛け、マツキンジーの方にその鼻先を挙げる。

これを人の手が制した。

「ここは動物病院じゃねーぞ」

羽柴がゲンザブロウの意気を挫く。

「んこくせー病院にでも行きやがれ、クソイヌ」と罵声を浴びせた。

「で、オッサンよお。オレはつくづく自分が冴えてると思ったね」

「――」

「なにせ何から何までテメエのことが気に入らないと思ったからよ」

「私はキミのことを気に入っているがね。キミたちのお涙頂戴なお友達ごっこのおかげで少佐はまんまとDUSTへ足を向けてくれた。本当に感謝しているよ」

「ロレッタの警備が手薄になった――なるほど、オレ達はまったくの能天気って感じだな。当たってるよ」

「その感じでお嬢様のお相手もお願ひしたい。心優しい少年のことだ――断わりはしないでしよう」

「ふざけるよ。テメエをぬっ殺しやロレッタの寄生体も消える。知らないとは云わせないぜ」

ぎりりと拳を握って羽柴。

これをフンと鼻を鳴らしてせせら笑うマツキンジ。

「いいでしょう。ですがロレッタお嬢様を侮ってはいけませんよ。」

エアフォース・エグゼクティブ・ワンを墜とすだけでは飽き足らず、私の部下を全滅させていますからね」

「うるせえんだよ、クソ野郎。テメエでそう仕向けたくせに何様のつもりだっ」

羽柴がすつと気を込める。

腕が円月を描き、複雑に交叉した。

「変身」

トーンを抑えた静かな口調で言う。

それに併せた、ゆったりとしたリズムで全身に光が走り、羽柴秀長の身体はその一部を異形へと変えて行く。

「フアランクス・アイガイオン」

いずれにしろロレッタを寝かしつけてやらなきゃ人間に戻ることはできねえ――

羽柴はそう心の中で念を押すと、半身に構えて腕から伸ばした刃を月光に掲げた。

その羽柴に対峙する人影。その身体は細く鋭い――それでいて鋭利な刃物の如く尖った毛先に覆われ、金色に煌いている様に見えた。黒い縁取りの円模様が小さく分布した模様をあしらった美しい肢体は、ほかのヴォージェと比べて細身で貧弱な印象を与える。だが地上最強の種を有する猫科を髣髴とさせる出で立ちからは隙1つ見出すことができない。なるほど、マッキンジーが云うとおり、一筋縄ではないかない相手のようだ。

「甘やかさないでくださいね。殺すつもりがなければキミが殺されるだけです。私としてはすぐに終わってしまつては実に興ざめということになります」

離れたところからさも愉快そうな声で件の男が茶化す。

「政治家つてなあ、べしゃりが過ぎるわ」

こんな奴と話してる場合じゃねえが――さて、どうする！？ 羽柴は打つ手なしとばかり身動きできず構えたきりその場から踏み出せない。

その躊躇を本能的に察知したスレイブ・ヴォージェが先に動いた。不意を疲れたフアランクスは一気に距離を詰められ、すぐさま攻撃範囲に捉えられた。

鉤爪の一閃が薙ぎる。

これをいなして避けし、半歩下がる。

やや遅れた羽柴を追って、返しの鉤爪がタイミングを合わせた。

ザンッ！

皮膚が3つの裂け目から破け、血繁沫が舞う。

二の腕が嫌な角度で曲がった。

ロレッタの変化した異形は、その細腕を肩が外れるほどの角度で引き上げて、溜めた力を放出せんと拳を振った。

これを紙一重で屈んでやり過ごすも、衝撃波が脇腹の骨肉をえぐって持ち去る。

「腕を組んで歩くってムードじゃないな、こりゃ」

笑ったつもりの口端が歪んでひきつる。

羽柴は上半身を背中に反らし、踏み込んで勢いを乗せてくるりと回った。

低い姿勢からソードをかち上げる。

女豹を掠る。

はらり、と金色の毛先が散った。

羽柴の決意の鈍りが狙いを外す。

それを意識しつつも無自覚に手を緩める己に歯噛みする。

一連の流れの合間に、足元の霧凇、そして離れた場所に居るゲンザブロウが視界の端に入った。

どうしたらいい——！？

つもりはなくともそう目で訴える。

これを遮る陰。

上から被さるヴォージェの両腕。

咄嗟に受け止める。

両の掌を合わせて止める、——が、しかしジリジリと押し込まれる。額に汗が浮かび、片膝がアスファルトに減り込んだ。

圧倒的なパワーで潰さんとヴォージェが一気に体重を乗せる。

羽柴が堪らず声を挙げた。

このままでは肩が砕かれる。

「羽柴！」

見かねたゲンザブロウが駆け寄る。

これを破裂音が止めた。

小塊が地面と鼻先を打ち、キャン、と悲鳴を挙げてゲンザブロウが転げた。

「飼い主がしっかりしないから、ほら、すぐに動いてしまう」

マツキンジーがこちらに指先を向けて云った。

「お座りなさい。でなければ先に死にますよ」と脅す。

グウ低く唸って威嚇するも、満身創痕のゲンザブロウに今この男に抗う術は無い。

「おおそうだ。それともそこでお休み中の少年に死んでもらうのも一興ですね」

と大げさで下手な演技で示す。

「さあさ、遊んでいないでショーを続けなさい」

パンパンと拍手を鳴らして催促するマツキンジー。

可笑しくてたまらないといった感じであった。

しかしマツキンジーは唐突にこれを止める。

立ち上がるアメリカを目にしたからだ。

「フロイラインもお気づきのようだ」

それだけ確かめると再び羽柴を囃し立てることに専念する。

アメリカは覚束ない足取りで歩を進め、ゆつくりと異形の戦場に近づいていった。

――！

ゲンザブロウがそれを止めようと首を回して邪魔をするが厭わない。ぐいと押しのけて進む。

「少佐、貴女のような凡人が近づけばただでは済みませんよ」

マツキンジーが丁寧に忠告する。

ただし無理にその歩みを止めようとはしない。

見ものばかり放って置くと決めこんだ。

やがて思惑通り、アメリカは力比べを続ける2つの異形の傍に辿り着いた。

「少佐、逃げないと・・・危険なデートに巻き込まれるぜ」と羽柴。

「小僧、——羽柴と言ったか」

限界の中でこれに答える余力は無い。

「お嬢様は——、ロレッタは死を覚悟してらっしゃる」

「——の、ようだな、」

「いや、分かってないようだな羽柴」

「——・・・？・・・、」

「ロレッタは毒を飲んでいる」

「！？」

「な、なんだと」

アメリカの告白に驚き、力の抜けた一瞬にフランク스가押し潰される。

ぐあああ、と嗚咽が洩れてバキバキと骨の軋む音が聴こえた。

「悪魔憑きも葬る強力な毒だ」

「そ、そんなものを——どうして」

「お嬢様との約束として私の元で開発されたものだ・・・」

アメリカは話を続けながら胸元からナイフを取り出した。

「もしも彼女が変身をし、人を殺める様なことがあれば——」

「それで——か」

「彼女がカプセルをベルトに注入してまもなく1時間が経つ。早く彼女にこれを飲ませなければ助からない」

アメリカはナイフの柄に隠された小さなカプセルを取り出すと、羽柴の胸ポケットに差し入れた。

「貴様らの御人好しにはほんと虫唾が走る——、だからこそ信じられよう」

「な、なんのことだ。てめつ、ふざける・・・こつちゃそれどこ・・・」

「聖者の行進は葬儀の歌。奏でるには生贄たる死者が必要であらう」
アメリカの腕が満月の弧をなぞって短刀で空を切り裂いた。

——！

黄金の獣人の眼窩目掛けて振り下ろされたそれは、命中することなく宙に踊った。

即座に反応したヴォージェの右腕がこれをアメリカの全身ごと払いのけ、

大量の血液と引き換えに吹き飛ばした。

普通の人間がこれに耐えうる訳も無く、彼女の身体は数度跳ねて十数メートルを飛び退った。

「さ、——させるかよおっ！」

片腕を外した機に乗じ、羽柴が身体を捻る。

自然な関節の擦れによってフランクスはスレイブの圧力から脱した。

これにすぐさま反応したヴォージェは高く跳躍し、壁を足場にしてフランクスの背後に回りこんだ。

止めの斬撃を構える女豹、しかしその視界に羽柴の姿は無い。

——！

そのさらに背中側に影が乗った。

「お嬢さんと会うのは・・・これで最後かもしれないねえ」

羽柴は小声で言った。

「インヴィジブル・ストーク」

ヴォージェがそれに応えるかのごとく咆哮する。

全身の筋肉を絞り上げ、獣の力を解放する。

フランクス「羽柴を求めて闇夜を弄った。

その斬撃のすべてが空を切り、宛を失ったエネルギーが方々を碎いて破壊する。

粉々になったコンクリートの破片が四散して粉塵と共に周囲を閉ざした。

ついにはフランクスの気配を全く見失い、ヴォージェが戸惑い立ち尽くす。

二度、三度と見回す。

その身体が腹部からへの字に折れ曲がった。

空中で回って背中から落ちる。

そうはさせじとばかり今度は水平方向に力が加わった。錐揉みしながらフェンスに激突し、もんどり打って地面に打ち付けられる。

ヴォージェは体勢をすぐさま返して猫背に構える。

が、やはりフアランクスを視界に捉えることはできず、今度は真上からの攻撃を喰らった。

逆えび反りにひしゃげて跳ね返り、ゴム鞠のようにバウンドする。

その背中を鈍く黒の稲妻が裂いた。

悲鳴のような叫喚が残響音となって飛び回り、突然しじまに変わる。遅れて埃が風に乗って飛散すると、そこに羽柴の姿が浮かび上がった。

そして足元の少女を抱き上げると、しばし黙ったまま彼女の額に頬を合わせた。

「これは予想だにせず——」

相も変わらず抜けた調子で煽り立てるマツキンジー補佐官。

結末を迎えたことに満足したのか、高みの見物から降りて壇上に躍り出た。

「観客に満足いただけて光栄だね」と羽柴。

おや——！？

と、マツキンジーがわずかに首を傾げる。

素直さが癪に障る。どうでもいいことだ——と念じて、

「役目の終わった軍人は退役し——、大統領の娘はスキャンダルに塗れて事実も打ち明けずに他界。父親の政治生命は終わり、この私にお鉢が回ってくるとなれば、この件で失態を犯したあなた方日本のDUSTは跪き……配下となるわけです。実に喜ばしい未来ではありませんか」と、云った。

「そうかい、良かったな」

「では私は本国に凱旋して早速先の準備しなくてはなりません、いずれまたお会いしましょう……」

そう云ってマツケンジーは背を向け歩き出す。

右の手を上げて別れの合図を送る。

空いた手で無線を取り出すとヘリを寄越すようにと指示を出した。刻を待たずして上空に現れたヘリが見えた。

これを確認してからもう一度挨拶を交わそうと振り向いたマツケンジー。

その眼が踊った。

屋上は藻抜けの殻だった。

腑に落ちない気分ではあったが、ファランクスである羽柴に重症を負っているとはいえジャベリンがいるのだ。素早く運び去ったのだろうとあまり深くは考えなかった。

真上に位置したヘリから縄梯子が垂らされると、マツケンジーは速やかにこれを昇る。

ヘリは病院の屋上を離れ、目的の進路に向けて旋回を始めた。

襟を正し、やや乱れた服装を引き締めるとリラックスした姿勢で窓の外を見やる。

満足そうに笑みを浮かべてことの顛末とこれからさきの栄光に思い耽る。

——はずだった。

急遽ヘリが姿勢を崩し、大きく傾いて機体を回転させ始めた。

「ど、どうした——！」

優れた運動神経で意識を保つも、強力なGに体の自由を奪われてどうすることもできない。

「分かりませんっ——」

「故障か!？」

「いえ——故障では」

「じゃあなんだ、いいからなんとかしたまえ！」

「それが、操縦方法がわかりません」

「なんだと！？——」

ヘリはますます回転速度を上げ、完全にコントロールを失っていた。ちつと舌打ちし、マッキンジーが全身を力ませる。

それを見たパイロットが悲鳴を上げると、その眉間を串刺しにした後、ドアハッチを開けて屋上へと飛び降りた。

だが不安定なヘリの挙動に足を取られ、プロペラに打たれてバランスを崩すと、墜落する機体に巻き込まれて地上に激突した。

立て続けに爆発炎上して炎と真っ黒な煙が立ち上がり、辺り一面炎に包まれた。

それでもゆらりと陽炎を揺らめかせながらレギオンが姿を現す。

その前に人影が立ち塞がった。

「ロレッタ、生きていたか」

レギオンがその人影に向かって呼び掛ける。

ロレッタは返事1つ返さず、両手を腰の辺りで合わせてマッキンジーを見据えている。

「まあいいだろう。生き恥を晒すがいい」

そう云ってマッキンジーがその手を引く。

さして嫌がる風もない彼女に逆に違和感を感じ振り向くとそのとき、
「ぎゃっ！」

と叫ぶ声が聞こえた。

それは自分の口から出たものだった。

激痛が腕に走り、見ればロレッタから伸びたツララが掌を貫いていた。

直後腕が痺れ、脚まで伝わってその場にへたり込む。

夜露を湛えた芝生がズボンの裾を濡らし、不快感を募らせた。

「毒だと——まさか」

見上げると少女の姿はもうそこには無かった。

シウルシウルと背丈が縮まり四つ足の獣へと形を変貌させる。

ぐらりと頭を振りながら、目眩を起こして立ち上がるマッキンジー。

その背中がパツクリと裂け、赤い液体が間欠泉の如く立ち昇った。唸るような低い絶叫を喉で鳴らし、身体を震わせる。

背後から現れた少年はポケットに手をつ突っ込んだままマッキンジーの横を通り過ぎ、

ポンポンと彼の肩を叩いて四つ足の獣まで歩いて並んだ。

最後に上空からフワリと少年が降りて3者居並ぶ。

「こ、こんなときに墜落するなぞと」

「偶然じゃない、パイロットは『操縦方法を忘れてしまった』という嘘の記憶を植え付けられたのさ」

「何っ!？」

「そしてヘリに飛び移っていたオレが操縦桿を握って墜落させた。ま、自慢じゃねえがそういうゲームは苦手なんだ。オレの数少ない欠点だな」

「ロレッタにやられたお前が、透明化なぞ——」

羽柴は右手に短剣を取り出し、チラチラと月明かりを反射させた。

「それはあの女の——」

「ご名答。少佐が渡したカプセルは1つじゃなかったってことさ」

「ダメージを回復する薬も入っていたのか」

「ホントはお嬢さんに使うためにね」

と云って羽柴はナイフを弄ぶ。

「貴様ら——、人に傳く希少な悪魔憑きと目溢しさえすれ、それすら理解できぬ下等な存在とはな。これだからDUSTなぞクズ同然

と呼ばれる由縁よ」

「御託はいい——」

クイクイ、と羽柴が指を曲げる。

「掛かって来い」

カッ——!

レギオンの双眸に怒りが宿り、その憤怒に駆られた衝動で羽柴たちに突進する。

「やむ得ん、日本DUSTは今日のこの日に滅び、のちに我直々に

再興せん」

マツキンジーは猛然と接近し、両腕を左右に広げた。その身体の中から放たれた発光弾が周囲を明るく照らし、同時に焼き払った。

墜落事故の炎と混ざり合って夜空を焦がす。

その効果範囲には留まらず、瞬時に飛び退りこれを回避する羽柴ら。息の合った動きにマツキンジーのためらいが生じる。

「そうさ——」

空中で踵を返しながら羽柴が云った。

「あんたそうやっていつも欲張りすぎなんだよ」

3つの光が悪魔の中心を貫いた。

2度目の朝日を拝む頃、病院は静けさを取り戻していた。

DUSTの処理班が駆けつけ、事態の收拾へと続く作業もこの頃には終わろうとしていた。

まるで何事もなかったかのようにすべてが修繕された——事実を知る羽柴達の心の中を除いて……。

寒空の下で、温かなダウンを羽織った霧島が未だ現場に残る羽柴の後ろに立った。

掛ける言葉が見つからずに間誤付き、けっきょく再び病院へと戻ろうとする。

「なんだ——」

羽柴の方から声を掛けた。

「えっ、ア、いや——。風邪、引きますよ」

と咄嗟に口から出たどうにも月並みな老婆心に自身、呆れ返る始末。羽柴は溜息を洩らした。

「ハシバ——」

ふと声がする方向に目をやると、そこに金髪の少女が立っていた。可憐な佇まい、しかし寒さにその小さな手が震える。

「あなたにお伺いすれば、すべてわかると聞いて——」

伏せ目がちに顔を落としてそう云う。それを聞いた羽柴が霧凧を睨みつける。彼は視線を逸らしてこの威圧を逃れた。

「私がこうして無事だと云うことは……また人として生きられないということですね」

そのやりとりを知らず、ロレッタはそう問うた。

「ああ、お嬢ちゃんの中にはまだ悪魔が住まうのさ」

羽柴が残酷に宣言する。

くつと唇を噛み締めてその事実に耐える少女。

その足元を毛皮の獣が寄り添って慰めた。

ゲンザブロウの好意を無下にしまいとロレッタが首に腕回し抱きかかえる。

そして獣は彼女の頬を舐めて応えた。

「だがよ——」

運び去られるヘリの残骸を見やり、羽柴が切り出す。

「1つは消えた——それだけは確かさ」

それに——と付け加えようとしたとき、ロレッタが走り出した。

大粒の涙と、……——満面の笑顔を重ねて。

「それによ、もう1つの悪魔も消えたに違いねえよ、きつとな」

ロレッタの背中を見送りながらそう、届けるまでもないといった小さな声で云った。

その先にアメリカの担架があった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4430q/>

パラサイト・ブラッド 『聖者の行進』 <セインツ・マーチン>

2011年1月30日02時18分発行